

上田市文化財調査報告書第23集

原 田 遺 跡

—長野県上田市原田遺跡発掘調査報告書—

1985年3月

上田市教育委員会
東信土地改良事務所

上田市文化財調査報告書第23集

原 田 遺 跡

——長野県上田市原田遺跡発掘調査報告書——

1985年3月

上田市教育委員会
東信土地改良事務所

序

上田市の山田地区は塩田平の中でも早くから開かれた地域です。殊に山田池や条里的遺構の存在はこのことを明瞭に物語っております。

今回、この地域を対象に農業基盤整備のための県営圃場整備事業が実施されることになりました。上田市教育委員会では長野県教育委員会の指導のもとに長野県東信土地改良事務所と協議を行い、山田の原田地籍、塙田地籍の緊急発掘調査を行うことに決定いたしました。

発掘調査は別所小学校の岩佐先生を調査団長にお願いし、炎暑の中、7月下旬より8月下旬迄実施されました。その結果、弥生時代後期の箱清水式土器片や土師器、須恵器片が数多く出土し、さらに溝状遺構や、柱穴群を検出することができました。また塙田地籍ではトレンチ調査により、条里的遺構の調査も併せて行われ、木片類や土器片が出土する等、成果を取ることができました。

このたびの調査にご尽力いただいた顧問の黒坂先生をはじめとする調査会、調査団の諸先生方、調査にご協力をお願いした地元の山田自治会や、塩田郷土史研究会、塙田文化財研究所の方々、並びに圃場整備にあたられた長野県東信土地改良事務所の関係者の方々に衷心より厚く感謝申し上げる次第であります。

昭和 60 年 3 月

上田市教育長 櫻井廣男

例　　言

1. 本書は、昭和 59 年 7 月 16 日から 8 月 20 日にわたり実施された塩田西部地区県営圃場整備事業に伴う原田遺跡緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東信土地改良事務所の依頼を受けて、上田市教育委員会が主体となって国庫補助事業として行った。現場調査は原田遺跡発掘調査団に事業委託して実施された。
3. 本書の執筆は以下のとおり担当した。

第 2 章 第 6 章 岩 佐 今朝人
第 3 章 第 2 節、第 3 節、第 4 章 柳 原 哲 夫
第 5 章 横 沢 瑛
第 1 章 第 3 節 第 3 章第 1 節 倉 沢 正 辛
第 1 章 第 1 節 第 2 節 事 務 局

4. 遺構、遺物の実測作業は柳原哲夫、林努、倉沢正幸、西川和恵、上田東高校史学班があり、図面トレースは柳原、倉沢が担当した。また本書に使用した写真撮影は宮沢文雄、倉沢が担当した。なお本書の編集は、調査団の話し合いにもとづいて柳原、倉沢が担当した。
5. 本書に収録した出土遺物は、上田市教育委員会が一括保存し、信濃国分寺資料館で管理、保管している。

目 次

序

例言

第1章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査会・調査団の構成.....	1
第3節 発掘調査日誌.....	4
第2章 自然的環境及び歴史的環境.....	8
第3章 検出遺構.....	13
第1節 層序.....	13
第2節 D地区について.....	14
第3節 E地区について.....	18
第4章 出土遺物.....	21
第1節 A地区出土の遺物.....	21
第2節 B地区出土の遺物.....	23
第3節 C地区出土の遺物.....	23
第4節 D地区出土の遺物.....	24
第5節 E地区出土の遺物.....	24
第6節 F地区出土の遺物.....	25
第7節 G地区出土の遺物.....	27
第5章 塚田地区的調査.....	35
第1節 発掘調査の概要.....	35
第2節 土層及び出土遺物.....	35
第3節 調査の結果.....	41
第6章 概 括.....	43

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図 (1:25,000)	9
第2図 各地区調査区域図	11,12
第3図 A地区、D地区、G地区層序模式図	13
第4図 D地区 SK01、SD01、02、03、Pit1~19 実測図	15
第5図 D地区柱穴状遺構のプラン	17
第6図 E地区 SK01、02、SD01、02、Pit1~18 実測図	20
第7図 土器実測図 (1~6—A地区、7~10—B地区)	31
第8図 土器実測図 (1,2—D地区、3~6—E地区、7~15—F地区)	32
第9図 土器実測図 (1~10—F地区)	33
第10図 土器実測図 (1—F地区、2~7—G地区)	34
第11図 石製品実測図 (1、2—A地区)	34
第12図 第3トレンチ東側セクション	36
第13図 第4トレンチA地区 南寄り東側セクション	36
第14図 第4トレンチB地区 中央東側セクション	37
第15図 第4トレンチC地区 北寄り東側セクション	37
第16図 第5トレンチA地区 南側セクション	38
第17図 第5トレンチB地区 南側セクション	38
第18図 第6トレンチ 南側セクション	39
第19図 第7トレンチ 南側セクション	39

図版目次

第1図版	原田遺跡遠景、D・E地区遺構全景
第2図版	A地区調査風景、D地区遺構
第3図版	D・E地区柱穴状遺構、遺物出土状況
第4図版	各地区遺物出土状況
第5図版	塙田地区調査風景、第3・第4トレンチ
第6図版	塙田地区第5・第6・第7トレンチ
第7図版	A地区出土遺物
第8図版	A地区・B地区出土遺物
第9図版	D地区・E地区・F地区出土遺物
第10図版	E地区・F地区出土遺物

- 第 11 図版 F 地区出土遺物
- 第 12 図版 F 地区出土遺物
- 第 13 図版 F 地区出土遺物
- 第 14 図版 F 地区出土遺物
- 第 15 図版 F 地区・G 地区・塚田地区出土遺物
- 第 16 図版 G 地区出土遺物
- 第 17 図版 A 地区・塚田地区出土遺物

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和59年度塩田西部地区県営圃場整備事業が計画され、その事業予定地内の大字山田字原田、字塚田地区に原田遺跡が存在していた。このため工事主体者である長野県東信土地改良事務所、上田市塩田平土地改良区と、長野県教育委員会、上田市教育委員会の関係者が事前に保護協議を行い、工事施工前の事前の緊急発掘調査を実施することに決定した。

7月3日、地元の山田公民館で原田遺跡発掘調査打ち合わせ会議が開かれ、発掘調査の内容や調査時期について打ち合わせが行われた。続いて7月9日、市役所に於いて上田市文化財調査委員会が開催され、原田遺跡発掘調査の調査計画や調査会、調査団の編成等について審議がなされた。

7月19日、原田遺跡発掘調査会、同発掘調査団会議が塩田公民館で開かれ、調査場所、調査方法等について具体的な打ち合わせが行われた。その結果、調査は大字山田字原田地籍と字塚田地籍で行い、原田地区ではグリッド設定をして平面発掘を行い、塚田地区ではトレンチを入れて条里遺構調査も併せて実施することに決定した。

こうして準備が整い、7月16日から調査現場においてテストピットの設定、掘り下げ作業が行われた。7月23日には発掘調査器材の運搬とテント設定、7月25日には鍬入れ式が行われ、本格的に調査が開始された。

調査は真夏の炎天下、連日行われ、ほぼ順調に進行した。特に原田地区では箱清水式土器片や土師器片、須恵器片が多数出土し、さらに溝状遺構や柱穴群を検出することができた。また塚田地区ではトレンチ調査により条里遺構調査が行われ、木片類や土器片が出上した。

現場での発掘調査は8月20日まで行われ、これ以降は市立信濃国分寺資料館に於いて、出土した土器片の整理、報告書の作成が行われた。昭和60年3月31日、調査報告書が刊行され、発掘調査は終了した。

第2節 調査会・調査団の構成

上田市教育委員会は上田市文化財調査委員会の答申に基づいて、新たに原田遺跡発掘調査会及び原田遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を原田遺跡発掘調査に出に事業委託して調査を実施した。調査会、調査団の構成は次のとおりである。

原田遺跡発掘調査会

代表	上田市文化財調査委員会委員長	遠藤憲三
委員	上田市文化財調査委員会副委員長	箱山貴太郎
"	上田市文化財調査委員	米山一政
"	上田市文化財調査委員	黒坂周平
"	上田市文化財調査委員	横沢理
"	上田市文化財調査委員	五十嵐幹雄
"	上田市文化財調査委員	亀井朝雄
"	別所小学校教頭・調査団長	岩佐今朝人
"	東信史学会	小池雅夫
"	塙田郷土史研究会	龍野常重
"	塙田文化財研究所	宮沢文雄
"	山田自治会長	竹内安雄
"	山田自治会発掘調査委員長	倉沢大八郎
"	圃場整備役員	竹下利次
"	上田市塙田平土地改良区理事長	南波常樹
"	長野県東信土地改良事務所技師	北沢勝

原田遺跡発掘調査団

顧問	黒坂周平	(長野県文化財保護審議会委員・上田市文化財調査委員)
"	五十嵐幹雄	(日本考古学協会会員・上田市文化財調査委員)
調査団長	岩佐今朝人	(上小考古学研究会長・別所小学校教頭)
調査主任	柳原哲夫	(筑波大学研究生)
調査員	横沢瑛	(西塙田小学校教諭)
"	林努	(上田東高等学校教諭)
"	倉沢正幸	(社会教育講師)
"	宮沢文雄	(塙田文化財研究所)
"	龍野常重	(塙田郷土史研究会)
"	塙入秀敏	(上田女子短期大学講師)
"	林和男	(信濃国分寺資料館学芸員)
調査補助員	西川和恵	(奈良大学学生)
事務局長	深井武雄	(上田市社会教育課長)

事務局次長 内藤 良典 (上田市社会教育課文化係長)

事務局員 川上 元 (上田市立博物館庶務学芸係長)

〃 倉沢 正幸 (上田市社会教育課文化係)

調査協力者、協力団体

(個人)

齊藤安大・倉沢大八郎・福沢清雄・竹内一夫・竹内祐一・竹下茂夫・竹下利次・
竹内安雄・東川光利・芳坂正助・竹内久・竹下正範・竹下文一・原田晴章・曲尾
勝・西沢隆行・齊藤儀雄・齊藤昭雄・福沢昭示・東川喜平・竹下喜久雄・竹下信
次・金沢直人・竹下元・倉沢清吾・東川義士・竹内比呂・東川英一・竹下たけ子・
齊藤達雄・池田治孝・竹花輝延・峯村康教・工藤覚・工藤善人・岩井房雄・岩井
喜久市・岩井哲也・野村卓・福沢虎治・芳坂真・西井とり子・芳坂芳子・竹内文
利・竹内憲一・竹下すぎの・金井正・金井好衛・金井豊子・竹内善吾・東川公子・
藤田一郎・竹下ふくよ・竹内幹雄・金井敏彦・竹下義忠・竹下三男・宮下京子・
倉沢トシ・竹内常通・柳沢朋邦・柏原良喜・小池寿・間口和仁・矢幡茂・中島守
雄・竹内稔・竹下製婆人・東川つちじ・福沢未子・竹下滋・福沢寿・竹下英勝・
竹下和替・竹下一雄・小池恭平・豊田唯男・池田知良・岡村豊治・武田保雄・増
沢源一・増沢りつ子・外村高吉・桜井章・西島清明・滝沢一二・南條泰三・山極
尚・東川菊枝・竹下智明・竹下一代・金井清三・齊藤保子・黒沢盛忠・竹内恒
雄・竹下勝明・東川英樹・横沢文子・齊藤芳郎・竹内征勇・竹下正平・竹下友治・
南波賢郎・伊藤信平・六川広光・竜野孝三・皆瀬茂・宮原泰人・宮原泰助・掛川
国広・堀内一広・久保田康広・竹内あき・金井よし子・馬場喜三・小泉まさ江・
和田広・小泉直幸・小泉寛子・小林スミ子・東川澄雄・東川千波・竹内慎平・東
川良三・前島和代・保屋野治郎・中村善衛・東川不可見・篠原弘・吉村政明・齊
藤善己・曲尾孝男・金井優子・竹内常喜・竹下源幸・酒井林・武田治夫・小林雄
作・倉坂重美・倉坂ちよえ・藤極幸信・竹下厚・黒坂努・伊藤洋子・竹下信広・
芳坂宏子・竹下弘志・宮原正久・坂田富芳・竜野孝三・東川恒子・東川澄川・前
島和博・竹下まさ子・竹内吉正・竹内伸治・金井善之助・竹内久・矢部勇二・東
川重久・若林昭子・佐藤仁美・花岡香代子・前島信恵・藤井裕子・小川由紀子

(団体)

塩田文化財研究所・塩田郷上史研究会・上田東高校史学班

第3節 発掘調査日誌

昭和59年

7月16日(月) 曇時々雨

原田地区の試掘調査を実施。テストピット(2m×2m)を6ヶ所掘る。特にTP-2、TP-5、TP-4より土器片多数出土。

7月17日(火) 晴

テストピットをさらに4ヶ所設定して掘り下げる。TP-1、TP-9より土器片出土。

7月23日(月) 晴

発掘調査器材の運搬、テント設営を行う。午後、重機によりTP-2を中心に表土除去作業。箱清水式土器(甌の脚部等)、土師器片、須恵器片が出土。

7月24日(火) 曇時々晴

重機によりTP-5周辺の表土除去作業。本調査区域をB地区とし、昨日作業をしたTP-2周辺地域をA地区とする。午後、A地区北東側部分の芋畠の表土除去作業を行う。黒褐色土層が顕れる。さらにTP-4周辺の表土除去作業を行い、この地域をC地区とする。A地区では、グリッド(2m×2m)設定作業を行う。

7月25日(水) 晴後雨

鍼入れ式を行い、本格的な調査が開始される。A地区グリッド設定作業を引き継いで行う。B地区の整地作業の後、A地区グリッド掘り下げ作業に着手。A地区西側寄りのグリッド(A-6、B-5、B-6、B-7、C-7、C-8)から箱清水式土器片が多数出土。午後B地区的グリッド設定作業に着手。またTP-1周辺の表土除去作業を重機で開始し、この地点をD地区とする。夕方雨のため作業を早めに切り上げる。

7月26日(木) 曇後雨

A地区的雨水排水作業。併せてA地区グリッド掘り下げ作業。遺物包含層である黒褐色土層の上部より土器片出土。午後雨が降り出し、途中で作業を中止する。

7月27日(金) 晴

A地区雨水排水作業及びグリッド掘り下げ作業。A-7の西南隅より櫻紋出土。またD-5より弥生時代の高環脚部出土。B-8では土器片が南北に帯状に出土した。午後試掘調査をした塚田地籍の第2号グリッド周辺を重機で掘り下げる。表土下1m50cmで幅1m前後の黒色土の帶が見つかったため、トレーナーを入れて条里遺構を確認することになった。

7月28日（土）曇時々雨

A地区グリッド掘り下げ作業、A地区北西隅のA-8、B-8の2'グリッドを拡張し、遺構の確認に着手。またB地区、C地区的グリッド設定作業を行い、B地区グリッド掘り下げ。C地区のB-5地点で土中に埋没していた甕の胴部が雨に洗われ露出しているのが見つかる。拂拭波状文が施されている箱清水式土器。

7月29日（日）晴

A地区の遺物取り上げ。D-5の高環脚部、C-6の単孔のある高環脚部、B-5の鉢口縁部の出土位置、出土層位、レベルを記録し、写真撮影を行う。B、C地区的グリッド掘り下げ。C地区は砂疊層で、黒褐色上層に茶褐色土層が混入。遺物はB-5地点の甕以外は殆ど出土せず、遺構も皆無。B地区はC-4、C-5より土器片が多数出土。しかし遺物出土面から約5cm下は黄茶褐色の硬質の砂疊層であり、地山と考えられる。A地区では、遺物取り上げ後更に5~10cmグリッドを掘り下げて、遺構を追求するが確認できず。更に北側にグリッド(4m×4m)を拡張。塙田地区では、重機で掘り下げた各トレンチのセクションの確認。

7月30日（月）晴

A地区、B地区、D地区的グリッド掘り下げ作業及び遺構検出作業。B地区では出土した遺物を取り上げる。D地区では北北東から南南西方向へ走る黒色の溝状遺構と須恵器片が出土。またE地区的表土剥ぎ作業を重機で行い排土中より高台付近とみられる灰白色の灰釉陶器片が出土。

7月31日（火）晴

B地区グリッド掘り下げ作業。遺構は黄茶褐色砂疊層のため確認できず。D、E地区的グリッド設定作業及び掘り下げ作業を行う。塙田地区のトレンチで木片が多数出土。

8月1日（水）晴

D地区、E地区的グリッド掘り下げ作業及び遺構検出作業を行う。D地区で溝状遺構、土塁状遺構、2箇所の柱穴状遺構が出土。またF地区的グリッド設定作業(3m×3m)、グリッド掘り下げ作業に着手。

8月2日（木）晴後雨

D地区、E地区遺構検出作業。須恵器、土師器片が疎らに出土。D地区にベルトを設定し、黒色土層を掘り下げる。F地区グリッド掘り下げ作業及び塙田地区的トレンチ掘り下げ作業を行う。さらに八木沢駅近くの基準点より絶対高を測量する。A地区のH・A・G・Iの杭の海拔高度 507.185 m。

8月3日（金）曇時々晴

午前中、雨水の排水作業を行う。さらに各地区の基準杭のレベルを測定する。D地区のH・D・B・2は507.087mで、F地区のH・F・C・5は508.502m。午後D地区の遺構掘り下げ作業。溝状遺構及び柱穴状ピットが出土。Pit1～Pit10を中心に掘立柱建物跡を想定。またSK01より土師質の高台付壙底部が出土。

8月4日（土）晴

D地区的遺構検出作業及びF地区グリッド掘り下げ作業。塚田地区では引き続いて重機によるトレンチ掘り下げ作業を行う。2日から山田公民館に於いて土器洗いを行っていたが本日で一区切りとなる。

8月5日（日）晴

D地区、E地区の遺構検出作業。E地区では柱穴状ピット2箇所と黒色に変化した部分が見つかる。D地区的柱穴状ピットの写真撮影を行う。また塚田地区的第4トレンチでは、各セクションの実測を行いトレンチ内を精査するが、古い条里畦畔は確認できず。塚田地区的地形測量を1:200で実施。

8月6日（月）晴後曇

E地区、F地区グリッド掘り下げ作業。E地区では、8箇所の柱穴状ピットが検出される。またH・E・D・2グリッドでは赤褐色の焼土が検出される。C地区的H・C・B・5グリッド内の黒褐色土層中に埋もれていた箱清水式土器（甕割部）を取り上げる。

8月7日（火）晴後雨

D地区的セクション実測。実測後セクションベルトはずし。F地区グリッド掘り下げ作業。塚田地区では第4トレンチ南側の7m拡張トレンチ内の黒色土層上面（地表下約90cm）より径2mmの孔が8個穿たれた長さ8.6cmの小木片出土。D地区では柱穴状ピットの写真撮影。

8月9日（木）晴

E地区に溜まった雨水排水作業。E地区にセクションベルトを設定し、黒色土面を掘り下げる。塚田地区では、第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチの壁面を清掃し、実測用の水糸を張る。写真撮影。

8月10日（金）晴

E地区黒色土面掘り下げ作業。須恵器片、土師器片出土。塚田地区では、各トレンチの排水作業と第3トレンチ、第6トレンチのセクション実測作業。

8月11日（土）晴

E地区的黒色土層掘り下げ作業。H・E・D・3グリッド内で赤く焼けた石と焼けた木炭を含む黒褐色土層が見つかるが、灰は出土せずかまど跡は確認でき

ず。内黒の土師器片及び須恵器片出土。特に底部にヘラ記号が施された須恵器の环が完形で出土。E地区北側の柱穴状ピット掘り下げ。塚田地区のトレンチのセンクション実測。

8月12日(日) 晴

D地区、E地区の遺構掘り下げ作業。清掃して写真撮影。E地区的平板測量。F地区に東西のトレンチ設定して掘り下げる。須恵器片、土師器片が出土し、黒褐色土層が現れたためこの層を追う。

8月17日(金) 晴

F地区グリッド掘り下げ作業。須恵器片、土師器片及び銷びた金属片出土。E地区的セクションベルト実測。写真撮影。塚田地区トレンチ内より木片、須恵器片出土。

8月18日(土) 晴

F地区グリッド掘り下げ作業。黒褐色土層を追うが住居跡の確認はできず。H・F・B・2グリッドより徳利状の淡緑色の灰釉陶器が出土。写真撮影。夕方テントをたたみ、調査器材を撤収。

8月20日(月) 晴

B地区、C地区、F地区的周辺地形測量を1:100で行う。山田公民館では遺物の注記作業を行う。本日で現場での作業はすべて終了。

昭和59年11月8日から信濃国分寺資料館で遺物整理を開始し、昭和60年2月迄調査報告書の作成を行う。

第2章 自然的環境及び歴史的環境

上田市の千曲川を境とした西方部は総称して川西地方という。総面積は約 160 km²ある。この地域は更に浦野川流域 (93.6 km²) と産川流域 (67.2 km²) に分けられる。普通塩田といわれる地域は産川流域を指し、上田市合併以前の塩田町である。この塩田は、東に小牧山塊、西に夫神・女神・大明神の山々を有する西部山地、南は巍々と聳える独鉢山塊、北は浦野川流域地方と区切る川西丘陵山地に囲まれた橿円形盆地状の平坦地で、塩田平といいならされている。

この塩田平の生成については、現在の河川による水蝕營力のみでは考えられず、第三紀末の地殻運動や、侵食によって洪積紀には湖沼化し、そこに泥岩、砂岩等の堆積があり、更にその地盤が隆起し陸化し、再び現河川の營力による扇状地堆積層をのせているのである。

当原田遺跡及び塩田遺跡のある山田地籍はこの塩田平の西方にあり、この西方にある山地群は丘陵性の山地からピラミットあるいは帽子状に屹立している山々であるが、その一つの女神岳 (926 m) を南北に背負い、その山麓に集落が発達している。女神岳は第三紀の別所層、青木層の堆積岩層を切り、岩株状に貫入した玢岩である。山田地籍の範囲はこの女神岳の山腹より源を発し東流する追開沢川(寺沢)と、夫神の山腹より源をとる湯川に挟まれた台地状の平坦面にあたる。集落は緩斜面の追開沢に沿った所に密集して、下方の平坦面は広い水田地帯である。またこの地籍には丘陵性台地を利用し、湯川より水の取入口を持つ山田池が築造されている。

遺跡は水田を展開している平坦面にあり、畑の耕作地を表探すると多数の弥生・土師器・須恵器の破片を散見する。

この地域は溜池が表徴するかのように内陸性の気候を呈し雨量が乏しく、年間降水量が 1,000 mm内外である。また四周の山地は別所層の頁岩が多く、その堆積土であるため、保水力の大きい粘土地帯であることも特徴といえる。

塩田平には遺跡が多く存在し現在発見されている遺跡は 180 余あり、古墳は 40 数基にのぼる。しかし旧石器時代の遺跡の存在は知られず、遺物も発見されていない。

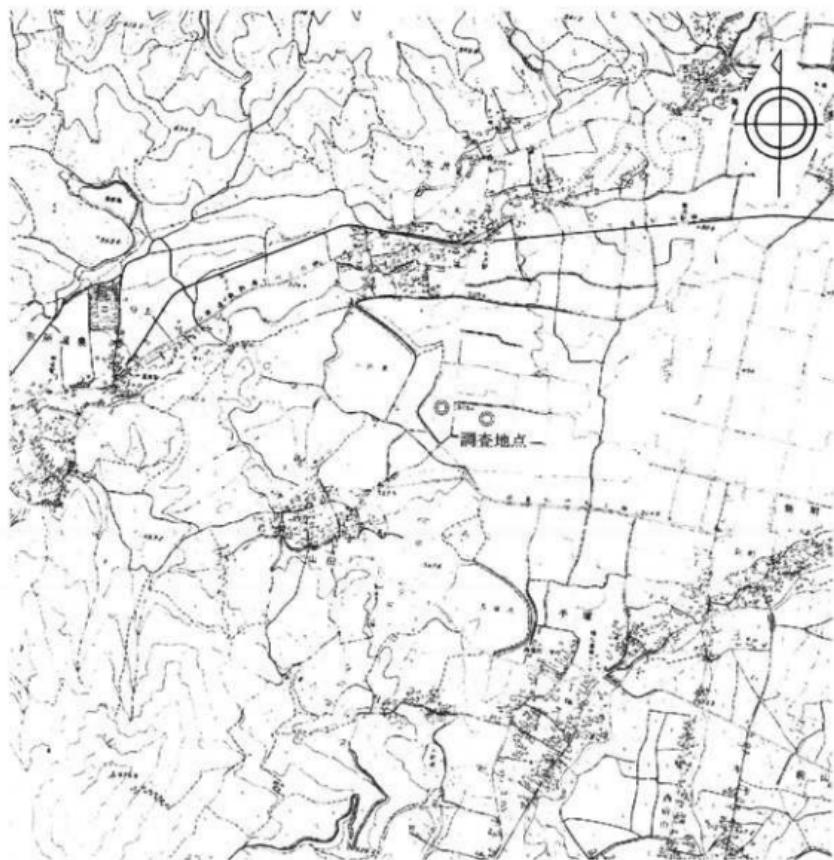
縄文時代の早期の遺跡は湯川最上流の塩水・比蘭樹遺跡があり、前期は同じ湯川流域に北浦遺跡、産川中流域に神戸遺跡が知られている。中期になると急に増え、各河川の両岸に沿った所に分布するようになる。樋ノ口遺跡出土の区向文土器や検見田遺跡の調査の際発見された土器は代表的なものである。後期になると遺跡も減少し晩期に至っては全く不明になっている。

弥生時代の遺跡や遺物は、後期の箱清水式といわれる千曲川流域一帯に文化圏をもつ土器文化につきるようである。天神・柿木・西光坊の遺跡はすでに調査され、遺構遺物が検出されている。

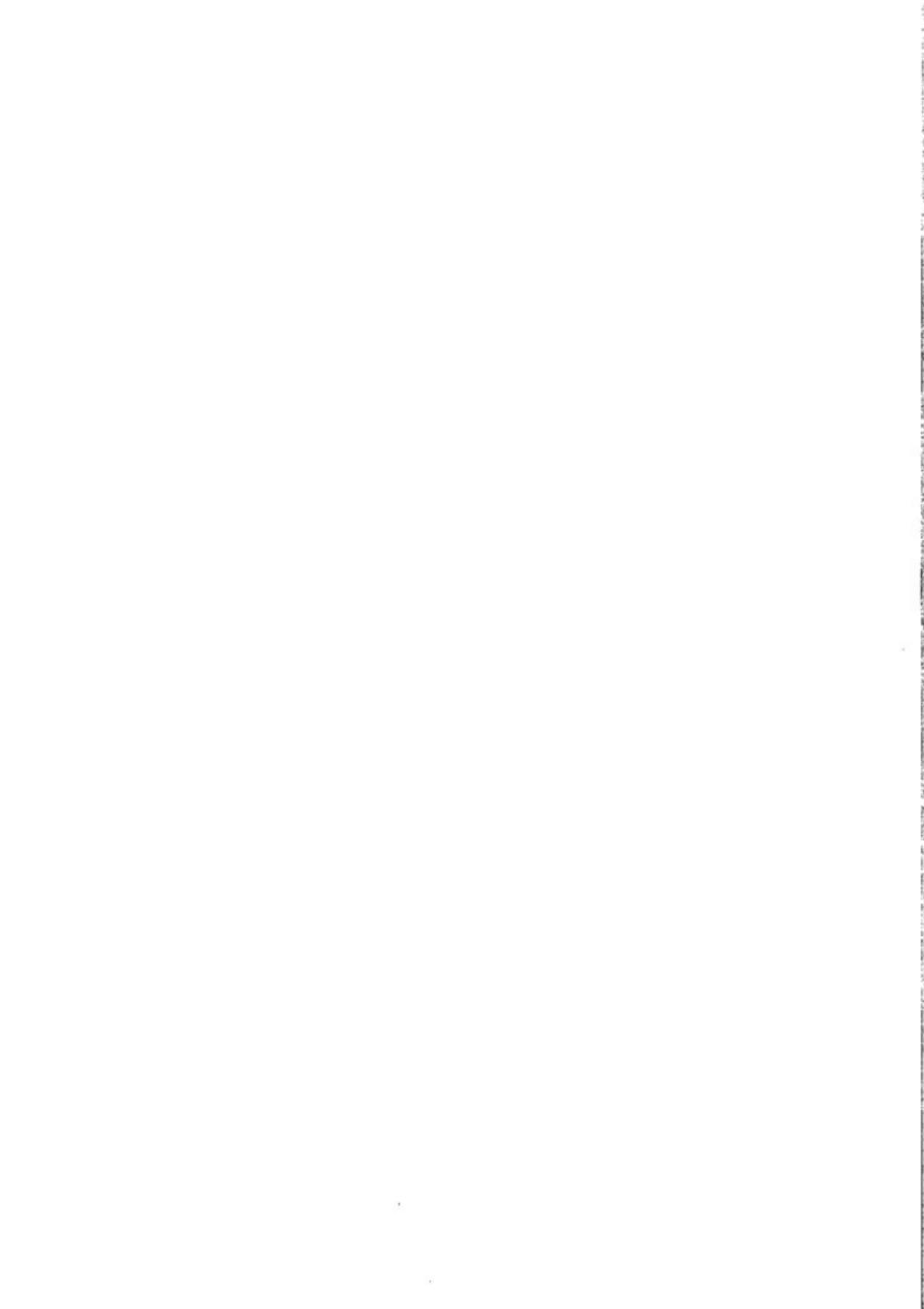
古墳時代は王子塚古墳は中期に属する可能性も考えられるが、他はすべて後期の群集墳である。小牧山塊には東信地方でも最大の数量を持つ下之郷古墳群が存在している。南の独鉛山塊の山麓には群をなすものではなく、僅か数基点在するに過ぎない。これは北斜面であり、山麓が急斜面によるものであろうか。西部山地はやや多く、南東斜面にはいくつか築造されている。

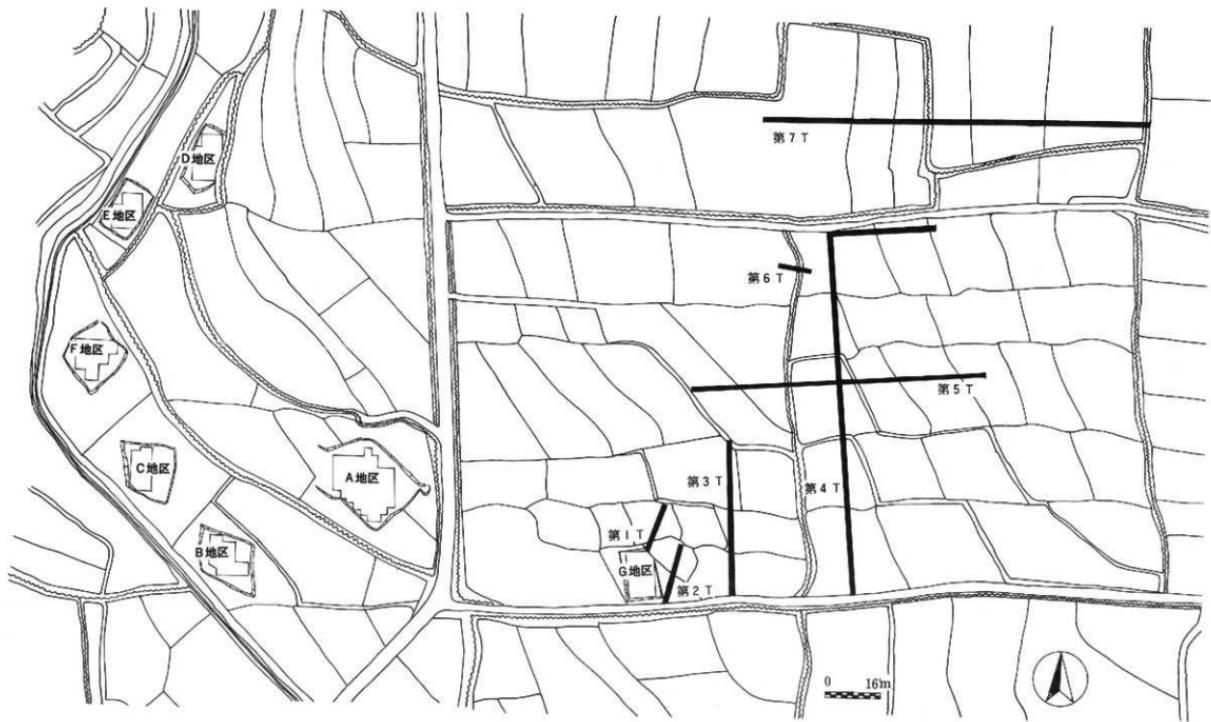
歴史時代に入ると俄然質、量とも多くなり、城館址、条里遺構、寺社跡など文献資料とあいまってにぎやかさである。塩田城、条里遺構についてはすでに調査が進められて幾多の成果もみられている。

当山田地籍には縄文時代の石斧や石鎌が発見され竹の裏・上打越遺跡、弥生時代の遺物を出す原田・塚田遺跡、平安時代の須恵・土師片の出土を見る西村・竹の裏・塚田遺跡がある。



第1図 遺跡周辺地形図 (1 : 25,000)





第2図 各地区調査区域図

第3章 検出遺構

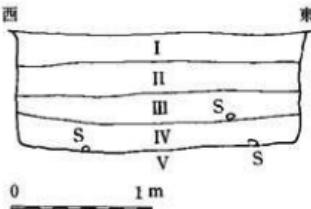
第1節 層序

原田遺跡は上田市大字山田字原田に所在している。この地域は山田集落の背後山地よりの沢水や湧水によって形成された台地末端の微小扇状地であり、西南側から北東側に緩やかに傾斜している。遺跡の平均標高は 507 m から 508 m であり、A 地区、B 地区、C 地区、D 地区、E 地区、F 地区の 6 箇所の地区を調査した。ここでは弥生時代後期の遺物が多数出土した A 地区、遺構が検出された D 地区及び土師器片、須恵器片が出土した塚田地籍の G 地区の層序について、模式図で示してみたい。

第3図 A地区、D地区、G地区層序模式図

A地区層序・

- 第I層：耕作土、暗灰褐色土層で厚さ 20 cm～25 cm。西
- 第II層：明茶褐色土層、溶脱層であるがやや不明瞭、
弱い粘性、厚さ 20 cm～25 cm。
- 第III層：茶褐色土層、粘質、厚さ 13 cm～15 cm。
- 第IV層：黒褐色土層、遺物包含層であり、
比較的粘性が強い。厚さ 20～22 cm。
- 第V層：茶褐色土層、やや砂質で粒子が粗い。
粘性をもつ。

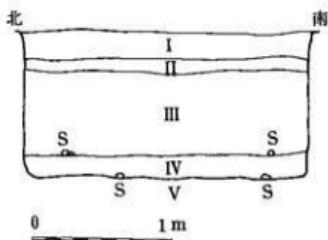


A地区層序模式図

(TP—2 北壁セクション図をもとに作成)

D地区層序

- 第I層：耕作土、暗灰褐色土で厚さ 20 cm～25 cm。
- 第II層：暗橙色土層、溶脱層、弱い粘性、
厚さ 8 cm～10 cm。
- 第III層：明茶褐色土層、粘性、厚さ約 60 cm。
- 第IV層：黒褐色土層、遺物包含層であり粘質、
厚さ 13 cm～15 cm。
- 第V層：灰茶褐色土層、茶褐色の層が混入し、
砂粒隕を含む。

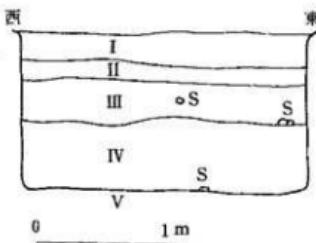


D地区層序模式図

(TP—1 東壁セクション図をもとに作成)

塙田地籍G地区層序

- 第I層：耕作土、暗灰褐色土で厚さ20cm～25cm。
- 第II層：黄褐色を帯びた灰白色土層、弱粘性、
厚さ15cm～20cm。
- 第III層：黒褐色土層、遺物を少量包含し、粘質。
厚さ26～30cm。
- 第IV層：暗茶褐色土層、やや粘質で厚さ約50cm。
- 第V層：灰色砂質層、粒子が粗い。



塙田地籍G地区層序模式図
(TP-2北壁セクション図をもとに作成)

第2節 D地区について(第4図)

1 溝状遺構

全地区を通して検出された溝状遺構は、原田地籍D地区に於ける第1号溝状遺構(SD01)と第2号溝状遺構(SD02)と第3号溝状遺構(SD03)の三遺構のみであった。

ただし、SD02遺構とSD03遺構は、第1号上坡状遺構をあいだに挟み、その両側にはほぼ一直線上に繋がることから同一の溝状遺構と思われる。

(1) 第1号溝状遺構 SD01

緩やかな等高線を成す斜面が西北西方より東南東方向へ広がり、ちょうど傾斜の転換点手前付近に幅約3m～4mの農道が南南西方向から北北東方向に走っている。その農道の東南側土手には平行して走る溝状遺構である。

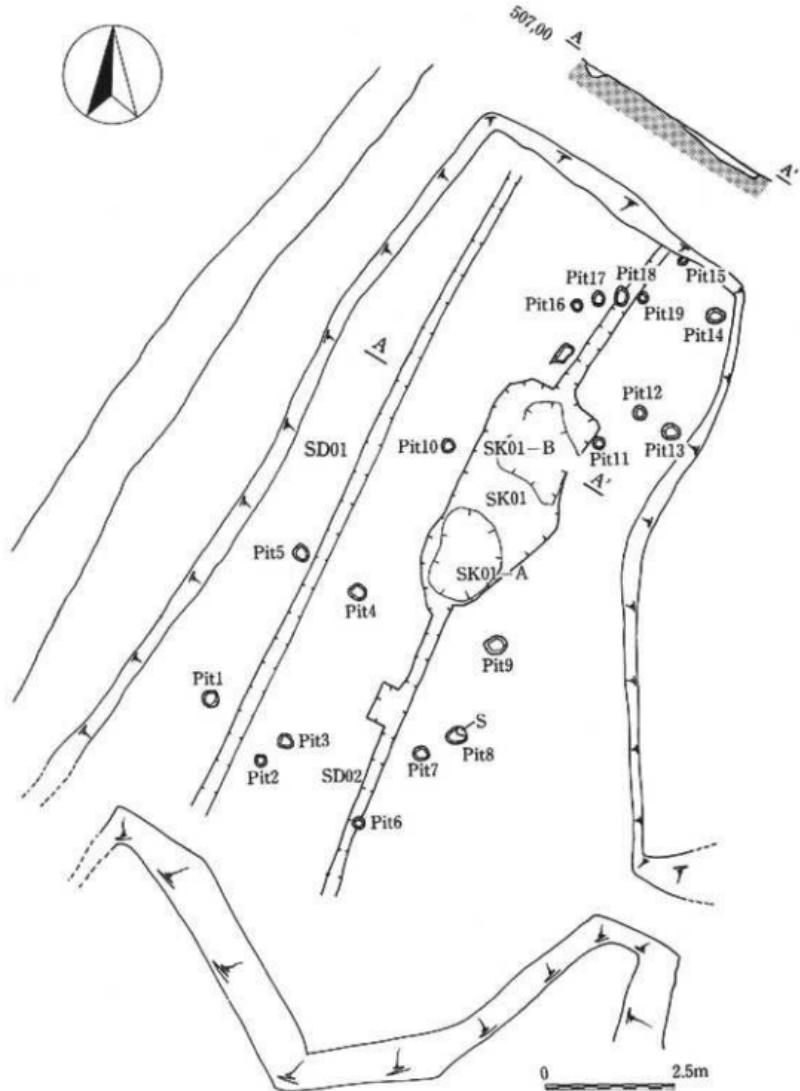
SD01遺構は、D地区の西南西隅からはじまり、その端で幅約30cmで北北東方向に行くに従い若干狭くなり約20cmぐらいになる。深さも同様に約24cmから約15cmと若干深さが減少する。断面は、底部にやや丸みを帯びた半円形を成す。南南西端でやや幅が広くなっていることから、北北東方から南南西方向に流れたものと思われる。本遺構の両端とも更に継続していると予想されるが、今回の調査では確認できなかった。また、遺構内から遺物は検出されなかつた。

その他、遺構の一部周辺にいくつかの柱穴状ピット(第4図 Pit1～5)が検出された。これらのピットと次に述べるSD02遺構の周囲に検出されたいくつかの柱穴状ピット(第4図 Pit6～9)については、後の柱穴状遺構の項で述べることにする。

(2) 第2号溝状遺構 SD02

本遺構は、SD01遺構と平行して走る長さ約6m、幅約20cm、深さ約10cmの溝状遺構である。北北東端では、第1号上坡状遺構(SK01)に繋がり、南南西端ではSD-01¹遺構同様に更に継続していると思うが残念ながら今回の調査では確認できなかった。

また、本遺構の南南西端より約3m40cm辺りから約4m20cmにかけての付近に西北西方に横約30cm×縦約80cm、全体を平均した深さ約9cmの長方形状を成すものがあり、SD02遺構



第4図 D地区 SK01、SD01・02・03、Pit1~19実測図

に付随している。

本遺構の流れ方は、遺構周辺検出面の標高などを考えあわせると SD01 遺構と同様に、北北東方から南南西方向に流れたと想定できる。

(3) 第3号溝状遺構 SD03

本遺構は、SK01 遺構に南南西端で注ぎ込むような形をとり、前述したように SD02 遺構とは SK01 遺構を互いにあいだに挟み一直線上になる。故に、SD02 遺構と同様に SD01 遺構に平行して走っている。北北東端は、SD01 遺構と同様更に継続していると思われる。南南西端の幅は、最も広く約 30 cm であり、北北東方向に行くに従い漸次その幅を縮小し、その端で約 20 cm となる長さ約 3 m 20 cm の溝状遺構である。

本遺構の深さは全体を通して特に大きな変化は見られないが、若干南南西方向に行くに従い深さが増す。そこに遺構の幅・周辺の検出面の標高を考えあわせると、北北東方から南南西方向に流れたと思われ、SD01・SD02 の両遺構の流れる方向に一致するのである。

また、この SD03 遺構の周囲にはいくつかの柱穴状ピット（第4図 Pit11～19）が散在した形で検出された。Pit16～19 の 4 個のピットはあたかも規則正しく一直線上に並ぶかのように見えるが、他のピット（Pit11～15）との関連をも含めて本遺構との関係は今回の調査では不明であった。

2 土塙状遺構

(1) 第1号土塙 SK01

D 地区の中央やや北東寄りにある土塙である。先の溝状遺構で述べたように、SD02・SD03 の両遺構に挟まれる形を成している。全体の形としては、南北の軸を時計回りに約 22.5° ほど回転させた軸を基準とした横約 4 m 80 cm × 縦約 2 m の隅丸長方形に近い形をなす。ただし、東側から南側にかけては、隅丸に成らず、対辺と異なり対称とならない曲線をしている。

また、土塙内は、中央部がやや盛り上がり、それを挟み 2 つの凹部が見られる。その 2 つの凹部は、先ず一方が、南西側に南北約 1 m 90 cm × 東西約 1 m 30 cm の橢円形をなす（SK01-A）。そして、その SK01-A は深さは最深部で約 25 cm を計る摺鉢状になっている。もう一方は、北東側にあり、三方隅が突出したような形を成している（SK01-B）。深さは最深部で約 20 cm を計る。

なお、土塙内よりは、土師器、須恵器などの破片が検出された。これらの遺物は意図的に土塙内に放棄されたものと考えるか、又は、SD03 遺構より自然に流れ込んだと考えるか、いろいろと考えられるが今回の調査では、それらの問題を解決する決定的な証拠となるものは得られなかった。しかし、仮に SD03 遺構から土塙内に流れ込むにしても溝の幅が狭く、水深からしても土器片を流すことが可能な水量及び流速があったとは想定し難い。また、一方の土塙内に放棄されたにしては、土器片の量が意外に少ないのが気になる。以上のことから、いずれにしても、これら土塙内より検出された土器片は、土塙内に何らかの形で埋没し、土塙が形成された

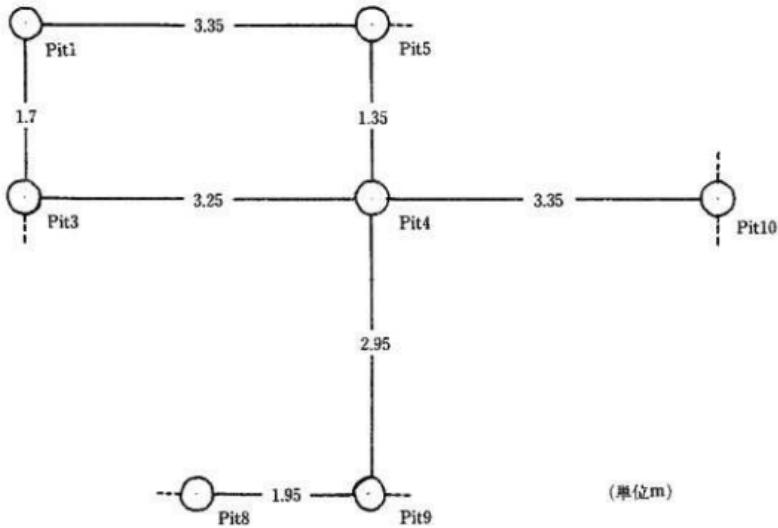
のは、SD01～SD03の3つの溝状遺構より古い時期であることが言える。そして、SD01とSD02+SD03の2つの溝状遺構は、時期的に新しく、中世以降に比定でき、その時期の暗渠ではないかと思われる。

3 柱穴状遺構

D地区は、南側隅と北西部を除き、ほぼ発掘範囲全域に渡っていくつかのピットが確認された。各ピット相互の関係やその各々の規模から考えて、掘立柱建物址に伴う遺構と断定するには若干問題があるかと思われる所以ここでは、とりあえず柱穴状遺構とした。

柱穴状遺構すなわち柱穴状ピットは、19箇所にわたって検出することができた。その大半は、径約20～40cm、深さ約10～20cmの円形もしくは橢円形ピットである。最深のピットで、深さ約25cm、最も浅いものでは約5cmしかないものもあった。これらの中で底部に平板な石を据えたピットは1箇所しか検出されなかった（Pit8）。

D地区において検出された柱穴状ピットで明確に掘立柱建物のプランの配列となるものはない。ただ、しいてあげれば、SD01とSD02の両溝状遺構の周囲にあるピット群（Pit1、3～5、8～10）である。そしてそれらを組み合わせると長方形と正方形に近い形を合わせた建物（第5図）を想定することができるので、参考までに掲載しておくことにする。



第5図 D地区 柱穴状遺構のプラン

第3節 E地区について（第6図）

1 壁穴状遺構

(1) 第1号壁穴状遺構 SB01

E地区は、東南側に南西方より北東方向に走る現在の畦畔があり、その東南側下の水田面との標高差が約2mを計る上段の水田面を掘り下げた調査区である。本遺構は、その現畦畔に沿うかのように、E地区の中央より東側から南側にかけての部分に検出された。そして、さらに東南側に遺構は広がり継続していると思われるが、今回の調査では、この遺構の規模及び範囲を明確にすることはできなかった。また、遺構の北側から南側にかけての壁の確認もできず、壁穴式住居址として断定するまで至らず、ここでは、とりあえず壁穴状遺構とした。

遺構内に、柱穴らしき施設と思われるピットが3箇所(Pit5~7)検出された。これらを含む壁穴状遺構については、後の柱穴状遺構の項で述べることにする。

その他、遺構内には、前述した現畦畔に沿う北東隅にカマドの一部かと思われる址が検出された。このカマドの一部(SD01)かと思われるものは、E地区の東北東隅に位置し、表土を除去した際に、掘り下げ過ぎられたため搅乱された部分に接して、その南側に位置している。袖石等の石組もなく、炉床と思われる部分が若干焼土となっており、約20cmほどの深さに堀りくぼめられている。先述した搅乱された部分に接していることから更に北側に継続していたと思われる。

遺構内の西隅に検出された焼土の部分は、約50cm×約75cmの梢円形のような形の範囲で、遺構とそうでない部分を分ける境界に近い内側約30cmのところにある。

また、遺構の南西側に位置しやや中央寄りの部分には、同じく焼土を伴う小さなくぼ地が検出された。それは、長さ約2.5m深さが南南東側で約15cmで、北北西方向より南南東方向に深さ、幅とも多少広がって走る小さな溝状の形をなしているようにも思われる。遺構と同様、南南東方向に更に継続していると思われる。

そのくぼ地の北東側に、南東側で現畦畔に接している小さなくぼ地が検出された。最深部は現畦畔に接している南東側で約10cmとごく浅い掘り込みである。このくぼ地と上記のくぼ地との関連は不明であるが、同様に現畦畔方向に拡大し継続するように思われる。

以上の遺構内のくぼ地を土坑状遺構として扱えることはやや問題があるが、表記上、前者をSK01、後者をSK02として明示した。

なお、遺構内からの出土遺物は、[△]なものとしてカマドの一部と思われる付近より完形の土師器、須恵器が1点ずつ出土した。他には、前述した2箇所の上記状のくぼ地内及びその周辺を中心として遺構内全体に渡って比較的多く検出された。遺物については、後の出土遺物の項で述べることにする。

2 柱穴状遺構

原田地籍D地区同様、E地区においても北北東隅を中心にいくつかのピットが確認できた。

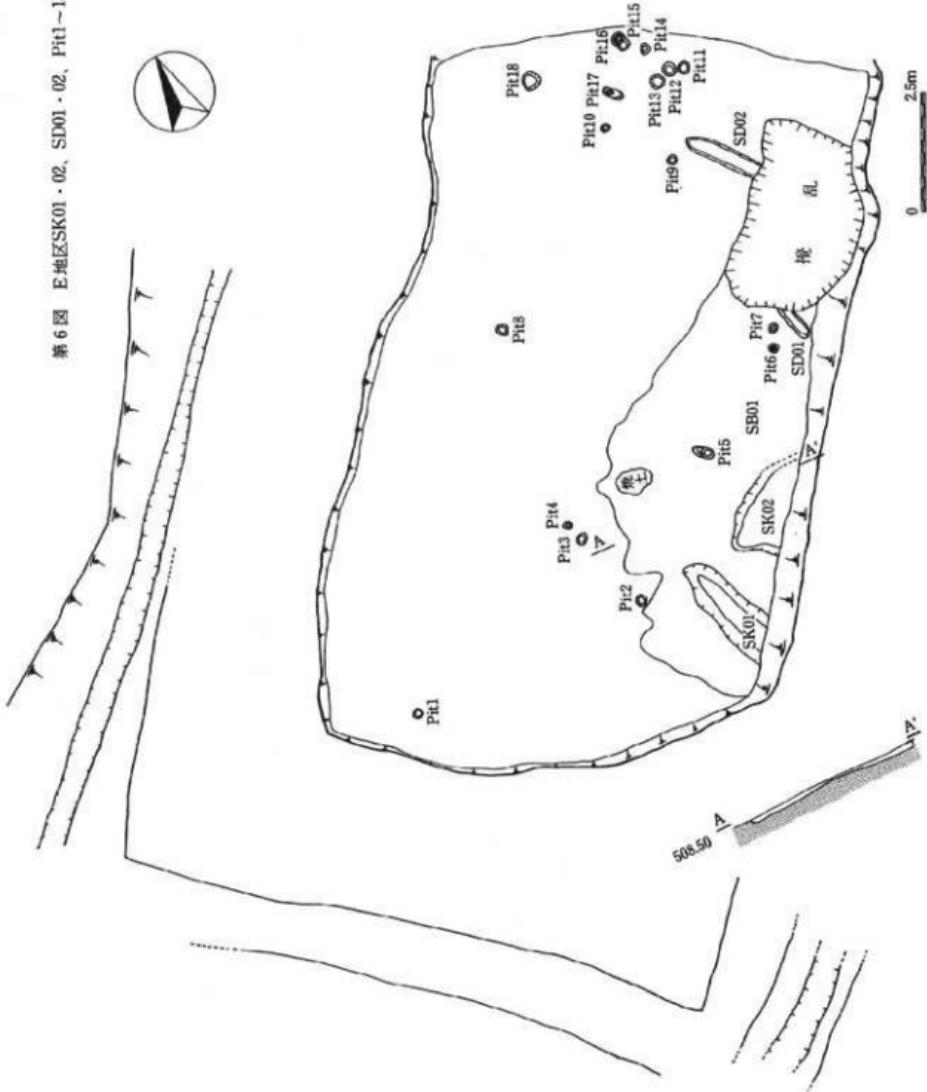
柱穴状遺構は、ピット総数18個を数え、その各々の規模は、大半が径約20~30cm、深さ約10~20cmの円形もしくはやや橢円形ピットである。柱穴内部に石を含むピットは存在しなかった。

SB01遺構内には、カマドの一部と思われるものの近くに2箇所(Pit 6, 7)あり、他には中央付近にある比較的大きく深い約20cm×約40cmの橢円形で深さ約20cmのもの(Pit5)が1箇所見られ、計3箇所が検出された。

また、SB01遺構の西縁部外側約75cm~約1mのところに2箇所の柱穴状ピット(Pit 3, 4)が検出された。他は遺構の南西隅に辺り遺構と遺構でないところを分ける境界線の外側の近くに1箇所柱穴状ピット(Pit2)が検出された。SB01遺構内とその遺構の外側にはあるが遺構に近い距離にある柱穴状ピットは、各ピット相互の関係や、その規模からしてSB01遺構と何らかの関連があると思われるが、時期的な問題も含めて今回の調査では明確にすることはできなかった。

次に、E地区において今回最もピットが集中したピット群とも言うべきところが、北北東隅部を中心とした径約3.5mの半円内である(Pit 9~18)。ピット総数は10個に及び、このピット群の中では、Pit18の径が最大で約35cm、一方、最深はPit16で約21cmを計り、このピット群内の柱穴状ピットは全体的に円形ピットが多く見られた。このピット群は、規則的な掘立柱建物のプランとなるような配列となるものがなく、極めてランダムに位置している。故に、今回の調査では、SB01遺構との関係及びE地区内における位置づけは言及できないといわざるを得ない。しかし、E地区はまだ北東方向にかなり水田面が続いていたことから、今回の調査区域を更に拡張できれば、更に継続してピット群が検出されるか、もしくは、違った形でピット群が検出されるのではないかと想定する。

第6図 E地区SK01・02、SD01・02、Pit1-18実測図



第4章 出土遺物

今回の調査は、面積的に非常に広範囲に渡り、出土した遺物の量も多かった。これら検出された遺物は、大別して弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、磁器、石器、木器などに分類できる。しかし、小破片が圧倒的に多く器形を知ることのできるものは各地区を通してほんの僅かであった。

そして、今次の調査では、調査区を便宜的にA～G地区に分けて設定したが、発掘の主体となったのは、遺構として確認できたD、E地区であった。調査面積が最大であったにもかかわらず遺構の確認のできなかったA地区からは、多量の磨滅した弥生式土器が検出された。また、F、G地区に於いては、比較的多数の遺物を出土しながら検出された時期が限られた調査期間の終わり頃であったため調査面積を拡張できず、残念ながら遺構の確認もできなかった。

なお、検出された遺物の包含層は、全地区ほぼ共通して第III層最下部の第IV層黒褐色土層との境界線付近から第IV層黒褐色土層全般に渡る範囲であることが確認された。ただ、各地区的第IV層黒褐色土層が現水田面よりどのくらい下に表われるか、もしくは層の厚さについては、地区ごとに多少異なる。

以下、検出された遺物について、各地区別に簡単に触れてみたい。

第1節 A地区出土の遺物（第7図—1～6、第11図—1、2）

A地区は、原田地籍に対していくつかの2m×2mの試掘グリッドを設定し掘り下げた中で最も遺物が多数出土した原田第2号試掘グリッドを中心と拡張した調査区である。その第2号試掘グリッドからは、弥生式土器片が耕作土上面より約60cmほど掘り下げたところから始まる第IV層黒褐色土層とその上層にあたる第III層との境界付近より検出された。また、出土遺物の中には、弥生時代後期に位置づけられる箱清水式土器の1つの特徴である彌描波状文が施された土器片も出土した。

A地区は、前述したように今次の調査における調査区では最大の規模を持つ。試掘調査の段階より本調査には大きな期待がかけられた。そして、検出された遺物は弥生式土器が圧倒的に多く、石包丁片と剥片石器も各1点ずつみられた。A地区全域にわたって出土している弥生式土器は、全て弥生時代後期に中部高地地方に於いて千曲川流域中心に隆盛した箱清水式土器と思われる。

それらの中で主なものより紹介していくと先ず器面全体が磨滅していて明確ではないが、当初は赤色塗彩されていたと思われる高环の頭部から脚部が残るもののが2点ある（第7図—1、2）。D5グリッドから出土した高环脚部（第7図—1）はやや薄手で筒形をなし、孔はない。

また、C 6 グリッドから出土したもの（第7図-2）は、脚部がラッパ状に広がり、単孔をもつ。その他には、B 8 と C 8 のグリッドの境界線上付近から口縁部と胴部上半に櫛描波状文をうめ、頸部に纏状文を有する小形の甕（第8図版-1）が検出された。B 5 グリッドからは、薄手で口縁部がかなり外反する鉢の口縁部から体部にかけての土器片（第7図-3）が検出された。内、外側の両面が磨滅してかすかに赤色が点在している。おそらく赤色塗彩がなされていたと思われる。また、D 5 グリッドからは、甕の口縁部と思われる土器片（第7図版-3）が検出された。この土器片は、薄手で口縁部は大きく外反していたものと想定でき、赤色塗彩もところどころに残る。磨滅が激しいが、明らかに内、外側の両面に赤色塗彩が施されていたと思われる。そして、大きな特徴としては、口縁部に山状突起が1箇所あることである。この山状突起に関しての類似例としては、上田市上平遺跡 SB01A 遺構より出土したほぼ完形に近い甕がある。普通山状突起を口縁部にもつ甕は、口唇部の外周上に山状突起が4箇所あるらしいが、これには2箇所まで確認されている。そして、内側の面をヘラケズリ、外側の面をヘラミガキされた上に赤色塗彩され、頸部には、2つ一组の小孔が2箇所にあり対になってある。この山状突起に対して一般的な見解は、装飾的なものというより、紐をひっかけるところもしくは他の用途が考えられ、機能的に何らかの役割を意図してつくられたものではないかと言わわれている。

土器片以外の検出された遺物では、石包丁片（第11図-1）と剝片石器（第11図-2）がそれぞれ一点ずつ検出された。H 6 グリッドより検出された粘板岩製石包丁片は、全体を半月形と想定するとその約1/3~1/2に相当する。穿孔は1箇所で、全体の石包丁の大きさを想定すると、他に現存する穿孔のすぐ近くにもう1箇所があったと思われる。参考までに、塩田平の弥生時代後期の遺跡として中野地区に和手遺跡があるが、そこからは10点の石包丁片が出土している。今回検出されたものはそれらと比較して考察するまでは及ばぬ資料と判断した。一方、C 7 グリッドより検出された石器は剝片であり、緑灰色をなし頁岩（シェル）製と思われる。

以上A地区から検出された遺物について簡単に触れた。A地区は出土遺物が多量であった割に全てに渡って磨滅が激しかったこと、また、遺構が確認できなかったことの二点から考察すると、A地区は全体を大きな溝状構造もしくは河川として把えることができないかと思えてくる。その場合、原田遺跡の南西に位置する現在の山田の集落付近を上流とみなせば、北東方向に向かって河が流れ、A地区は下流の河床の一部としてすっぽり覆われる。上流付近に弥生時代に於いても集落が形成され、例えば土器等を河に放棄し、それが下流にあたるA地区付近に流れつき溜まったと考えることもできる。もしくは、その集落が洪水によって流されたという非常に大胆な仮説をたてることもできる。しかし、今回の調査では、その仮説を証明できる遺構は残念ながら確認できず、A地区の遺跡としての性格を明確にすることすらできなかった。今後の調査に期待がかけられたのである。

参考文献：「和手一長野県上田市和手遺跡緊急発掘調査報告書」

上田市文化財調査報告書 第20集、1983

第2節 B地区出土の遺物（第7図—7～10）

B地区はA地区から南西方向に二段高い水田面に設定された調査区である。今回の調査の最初の段階で、試掘グリッドを原田地籍に設定し試掘調査した第5号試掘グリッドを中心として拡張した調査区でもある。第5号試掘グリッドの掘り下げに於ける遺物の出土状況は、前節述べたA地区の第2号試掘グリッドと併に弥生式土器片が多く検出された。遺物の包含層については、A地区と同様第IV層黒褐色土層といえる。

B地区から検出された遺物であるが、弥生式土器が多く、土師器、須恵器片は僅か数片しかみられなかった。A地区より出土した弥生式土器と同様に小破片が多く器形を知ることのできないものがほとんどであり、また、磨滅が器面全体に激しく及んでいた。

しかし、中には、甕の小破片と思われるものから箱清水式の特徴を示す櫛描波状文又は簾状文がかろうじて確認できたものが2、3点あった。他には、高坏の頸部が2点、孔のあるもの（第7図—7）とないもの（第7図—8）が検出された。D5グリッドからは、土師質と思われる径約3cmほどの小形の蓋（第7図—9）が検出された。つまみの部分は、頂上部が整形されずに隆起した形をとり、ミニチュアの甕もしくは壺の蓋と仮定すれば非常に興味深い資料といえる。ミニチュアの土器として一括資料として検出されなかつたのが残念である。

そして、B地区においても遺構の検出はできなかつた。しかし、A地区と異なる点は、B地区ではA地区の第V層茶褐色土層にあたる層が非常に薄く、そのすぐ下に硬質の砂礫層が露出したのが特徴である。これは、B地区からA地区にかけて地形上、標高が若干下がるに連れて、その砂礫層がいくらか傾斜しているとして説明ができるのではと思うのである。そして、その砂礫層は、前節でも若干述べた河床の最下層とみられ、A地区がB地区より遺物が出土したのは、A地区を以上のことから河床の傾斜変換地帯もしくは土器溜まりと考えれば理由が明快になると思われる。

第3節 C地区出土の遺物

C地区は、前節のB地区の北西側に位置する。原田地籍第4号試掘グリッドを中心に拡張し設定した調査区である。試掘調査段階においては、グリッドの東壁付近のA地区的第IV層黒褐色土層より半壊の弥生式土器が出土した。埋没した当時の状況をそのまま残し、耕作土上面より約1mほどの深さにあたるところからであった。しかし、小破片過ぎて器形を知るまでには至らなかつた。また、他の原田地籍の試掘グリッドの遺物出土状況と比較すると遺物の量は中位に位置づけられる。

本調査におけるC地区は、他の調査区と比較し、遺物はほとんど検出されなかつた。そして、B地区よりもやや浅い段階で顕著に砂礫層が全域に渡って露出し、当然の如く遺構も確認でき

なかった。ただ、C地区の北北西隅のB5グリッドより弥生時代後期の箱清水式と思われる胴部の約1/2が残る甕（第4図版一B）が検出された。口縁部から頸部まで、且つ底部を欠いてはいるが、胴部は上半の輪郭を確認できる。まるで部分的に輪切りされたかの状態で埋まっていた。器形の復元はできず、器表面の磨滅が激しかったが、箱清水式の特徴である柳描波状文は観察できた。この甕の出土したグリッド及び周辺のグリッドからは、他に遺物の出土がみられなかった。この孤立したかのような存在を見せる一括遺物は、果してどのように把えてよいのか、北側への調査区の拡張ができなかつたのが残念である。

B地区との関連についていえることは、次のようなことである。先ず、C地区に於いて遺物が殆ど検出されなかつたことと、B地区より全域に渡りはっきりと砂礫層が露出していることがB地区と異なる。これは、B地区で仮定した砂礫層からなる河床がC地区を含む横への広がりを持って広範囲に形成されていると言えると思われる。

第4節 D地区出土の遺物（第8図—1，2）

D地区は、今次の調査の調査区で最も北に位置し、西側には、南西方から北東方向に向かって走る山田池の東側にある自然丘陵がある。そして、原田地籍の第1号試掘グリッドを中心とした調査区であり、試掘調査に於いては、僅かの須恵器片が検出された。

本調査に於いてD地区からは、土師器、須恵器の小破片が出土した。中でも須恵器の破片が多かった。須恵器は、多量であった割には器形を知ることのできるものは少なかった。その中で主なものを一点をあげと自然釉のかかった甕の底部と思われるもの（第8図—1）がある。底部の外面にはヘラケズリによる調整がみられる。底部は体部にかけてやや直線的である。また、底部処理については、部分的にヘラケズリがなされているようにも見えるが不明としておく。

一方、土師器では、壺形土器の底部（第8図—2）が一点SK01遺構内のくぼ地（SK01-A）より検出された。底部は、回転糸切技法が用いられ高台が付いている。手法上の特徴としては、ロクロ使用によつたものでナデ整形され、内面は、黒色処理されている。特に、回転糸切された底に、高台を付けナデ整形した技術的な製作過程が想定できる資料である。以上のような形状からみて国分式又は平安時代の土師器に比定できる資料といえる。

第5節 E地区出土の遺物（第8図—3～6）

E地区は、当初調査対象区域と考えていなかつたため試掘調査も行っていない。しかし、D地区において遺構の確認ができたため、周辺にD地区との関連を考えたく認められたD地区に最も近くに位置する調査区である。D地区より南西側に約2m 60cmの標高差をもつ一段高い水田にグリッドを設定し調査を行つた。

E地区から検出された遺物は、須恵器を中心として土師器、灰釉陶器が検出され、SB01遺構内及びその周辺に多くみられた。

須恵器の主なものには、D3グリッドから検出された完形の壺（第8図-3）がある。底部は、回転糸切技法が用いられた平底をなし、ヘラ記号が確認された。口縁部は殆ど外反せず、体部は直線的である。手法上の特徴としては、ロクロの水ビキ成形後若干ナデによる整形を施し、器面を調整していると思われる。

一方、土師器は須恵器に比べるとやや量的に減少するが、D2グリッドより完形の环形土器（第8図-4）が出土した。平底面は外縁部に小さな段差がみられ、回転糸切り底が外縁部で何らかの形で徹底しなかったか、ヘラによって意図的に形が成されたものかと疑問が残る形状を示している。全体的には薄手で、体部で内彎し、口縁部やや外反するように見える。そして、内面は、黒色処理が施されている。手法上の特徴としては、外側の器面が、体部から口唇部の手前まで磨滅が激しいが、ナデ調整していると思われる。大雜把だが真間式～国分式（奈良～平安時代）に比定される資料である。

以上の2点の土器は、いずれもSB01遺構内の北東隅に検出されたカマドの一部かと思われるもののすぐ近くよりあたかも一括遺物かのように出土している。何らかの関連が予想されるが、今回の調査ではその周囲に他の資料を検出できず、把握できなかった。

その他に、かすかに形状の覚えることのできるものとしては、器面に自然釉のかかった須恵器の壺の口縁部と思われるもの（第8図-5）が一点検出された。また、高台が付き、灰白色を成す灰釉陶器の壺の底部（第8図-6）が一点検出された。おそらく灰釉陶器の方は近世以降の陶器と思われる。

第6節 F地区出土の遺物（第8図-7～15、第9図-1～10、第10図-1）

F地区も、前節のE地区同様に新たに調査区域としてグリッドを設定し調査を行った。原田地籍の第9号試掘グリッドの北西側に位置する。調査区の西側には、東南方向より緩やかなカーブを描き、山田池東側の自然丘陵の斜面の水田がある付近の等高線に沿って北北東方向に走る農道がある。その農道がちょうど大きなカーブを描く部分の内側で接した位置に調査区が広がる。F地区は、あくまでもE地区との関連を探ることを主眼とし発掘調査を実施した。しかし、遺構の確認はできなかった。

F地区から出土した遺物は、意外に多く、他の調査区と比較して器形を知ることのできたものが多かったのが特徴である。検出された遺物は、大別して、土師器、須恵器、灰釉陶器などで、中でも須恵器の出土量が非常に多く見られた。

土師器は大半が环形土器で、内面黒色処理した資料（第8図-7～9、11～13、15、第9図-1、2）であり、内面が黒色処理されていないもの（第8図-10、14）は2点のみであつ

た。形態上の特徴として高台付の环は环の总数 11 個中 4 個(第 8 図—7~10)みられた。また、やや丸底のもの(第 8 図—11)が 1 個、平底のもの(第 8 図—12~14、第 9 図—2)は 4 個検出され、残りについては、底部の部分が欠損しているため不明である。全体的に胴部においてやや丸みを帯びて若干内側するものが多く見られる。また、口縁部は直線的なものが多く、外反しても顕著に外反するもの(第 8 図—15)は 1 点のみで、他は、僅かしか外反しない。器面の整形には、ヘラケズリ又はヘラミガキといったものは見られず、ナデを多用し調整している。底部処理は、不明なものを除いて、大半に回転糸切法が用いられ、典型的な糸切り底が認められた。この F 地区の資料を通して、环形土器に於ける丸底→平底→付高台という非常に単純明快に思える変遷の流れが把えることができたかのように思われる。しかし、平底と付高台の环は併用され、使い分けられていたかもしれない。ここでは、あくまで製作技法の観点から、回転糸切りされた平底に高台を付けたものが生まれるという製作技術の進歩の過程を想定したのである。また、より安定した高台の付いた环形土器への過程が、高台の高さが変化して行く中にも確認できると思われる。

その他の土師器としては、A 3 グリッドの西側に拡張したトレンチの北壁近くより、口縁部より胴部上半までの甕(第 9 図—3)が検出された。薄手でややくの字状に外反する口縁を有する。胴部は最大径が約 20.5 cm あり、器面にはナデ調整が施されている。特徴としては、内面の色調が頸部から口縁部の境辺りで変化し、頸部から胴部にかけてが、暗褐色で、口縁部側は橙褐色である。

次に、須恵器は、环・甕・皿・甕など各器種の破片と思われるものが多数確認された。しかし、器形全体を把握できるものは、小数に限定された。それらについて簡単に述べてゆくことにする。

先ず、环と確認できたもの(第 9 図—4、5)が二点検出されたが、いずれも平底で薄手という特徴を持ち、体部がやや内側する。そして、口径が大きいわりに器高が低いので、全体の形は平べったい形である。底部処理は一方(第 9 図—4)は不明であるが、もう一方(第 9 図—5)はヘラ記号が糸切り底の上に施されている。器面は、いずれも内、外面の両面に小さな段差が見られる。これは、ロクロの水ビキ成形によるもので、若干ナデによって調整も施されていると思われる。

その他には、环形土器の底部とも思えるが甕の底部としての可能性もあると思われるもの(第 9 図—6、7)が二点ある。平底で糸切り底にヘラ記号が施されているもの(第 9 図—6)、そして、もう一点は、高台が付き糸切り底がやや外反するように下がり気味になっているもの(第 9 図—7)である。

A 2 グリッドからは、底部がやや厚手で若干上げ底気味のもの(第 9 図—8)が検出された。糸切り底は、外縁部分がナデられたようにスペスペして糸切痕が消されたかのように見える。内面は、小さな段が緩やかな波状のようなものを形成している。これは、ロクロの水ビキ成形の痕跡を明確に表わしたものと言える。

A 4 グリッドの西側に位置するところからは、全体の器形を知ることはできないが、比較的薄い平底を持つ底部（第9図-9）が検出された。底部から体部にかけて直線的で、器面の外側にはタタキ目がところどころ途切れではいるが底部から体部にわたり施されている。そして底部端から約1cmの範囲では、左下に向かって斜めの縱方向に施されたタタキ目が、真横向きに施されたヘラケズリに上より消されているのが確認できた。

同じく A 4 グリッドより出土したものに、口縁部から胴部一部までの臺（第9図-10）がある。口径約21.5cmで、くの字状に外反する口縁部を持つ。頭部から胴部にかけてかなり内彎すると思われる、最大径は胴部中位にあるものとみられる。器面の整形は、横ナデ調整を施していると思われる。

器種は不明だが、頭部に特徴を持ったもの（第10図-1）が検出された。これは、外側の口縁部に近い器面に左下がりの斜め方向にヘラケズリが一部施されている。この土器片は、口縁部から頭部にかけてやや内彎し、頭部ではほぼ直角をなして胴部へ続いている。頭部の胴部側への内面はスペベとしていて、明確に、口縁部側への内面のナデ調整とは異なっている。

灰釉陶器については、小破片の多かった中で唯一完形のものが検出された。現代の銚子（德利）とほぼ同じ形をなして、器高は約10cm、底径約7cmである。しかし、胴部における最大径は約7.5cmで、底部より約2.5cmの高さのところにあり、やや胴部において広がる形状を示す。内面の頭部・底部にはヘラケズリがみられる。底部のヘラケズリは、同心円の形をなした小さな段が3段ある。いずれも、ロクロ成形した後に、回転を利用してヘラケズリしたものと思われる。一方、外面は全体的に、淡緑色の釉が施されている。やや底部に近い部分は、釉が欠けている。底部処理については不明である。このように見えてくるとこの資料は、11世紀頃のものと思われる、他の遺物に比べ、やや後世のものと思われる。（第15図版-1 参照）

第7節 G地区出土の遺物（第10図-2～7）

G地区は、A～F地区が原田地籍における調査区であったのに対して唯一の塚田地籍に設定された調査区である。そして、塚田第2号試掘グリッドを中心に拡張し設定した。塚田地籍全体にランダムに設定した試掘グリッドの中では最も多くの遺物が検出された。

本調査に於いては、遺構は確認できなかったが、検出された遺物の量は原田地籍のA・F地区にも劣らぬほどであった。須恵器を中心として、土師器、灰釉陶器、箸のような木片などに分類できる。しかし、資料の大半は須恵器の小破片であった。

器形の知ることのできた須恵器は、高台の付いた壺の底部と思われるもの（第10図-2～4）が三点検出された。高台断面は三点とも四角形をなし、二点（第10図-2・3）は非常によく形態が似ており、底部から体部へが直線的である。また、底部は糸切底で三点とも下がり気味

でやや丸味を持っている。そして、その中の一点（第10図—3）は明確ではないがヘラ記号らしきものが見られる。三点とも、器面には、横ナデが施されている。

器種が同じという共通点を持った土師器と須恵器がある。いずれもツマミを持つ蓋の一部であり、違うのは、土師質（第10図—5）と須恵質（第10図—6）の違いである。前者は、楕円形で内部にややえぐれるくぼみをつくったつまみで、天井部はやや内凹する。後者は、扁平つまみで、天井部も扁平である。手法上両者が共通しているのは、ロクロの水ビキ成形後天井部を更にヘラケズリによる整形を施し器面を調整していることである。

他の出土遺物には、箸のような木片が数点検出されたが、何であるか、何に使われたものであるか確認することができなかった。

〔出土遺物一覧表〕

1. 土器

番号	器種	高さ mm	口径 mm	底径 mm	断面 法 線 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	泥	土	焼成	内 面	外 面	縫 合	出土地	測定 番 号	
1	壺	5.0	12.2	12.2				石粒多 石子多	良	好	赤褐色 赤褐色	赤褐色 赤褐色		A	7-1 8-3	
2	*	26.1	5.0	12.2	12.2	直筒形、やや済手	ヘラケズリ?	石粒多 石子多	良	好	やや灰質 灰質	灰質	+	2	7-1	
3	鉢?					14.5(?)×10.5(?)	口縁部(?)に痕跡有、W.T.	口縁部多 石子多	良	好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	+	3	7-2	
4	*	5.7	6.6	6.6	5.7	平底、済手	ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	+	4	8-3	
5	*	6.6	6.6	6.6	6.6	赤色塗形(ヘタケズリ)、3.5万?	赤色塗形(ヘタケズリ)、ヘタケズリ?	口縁部多 石子多	良	好	褐色 褐色	褐色 褐色	+	5	+	
6	*	6.65	6.65	6.65	6.65	14.5(?)×10.5(?)	赤色塗形(ヘタケズリ)、ヘタケズリ?	口縁部多 石子多	良	好	褐色 褐色	褐色 褐色	+	6	+	
7	釜?					山状突起	赤色塗形	口縁部多 石子多	良	好	孔隙質 (-無塗色)	孔隙質 (-無塗色)	+		7-3	
8	*						帰還状火文、漁火文	口縁部多 石子多	良	好	褐色 褐色	褐色 褐色	+	8	1	
9	瓶						口クロ成形、ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	孔隙質 孔隙質	孔隙質 孔隙質	+	9	7-4	
10	*	1.35	1.35	1.35	1.35	14.5(?)×10.5(?)	ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	孔隙質 孔隙質	孔隙質 孔隙質	+	8	+	
11	釜?						口クロ成形、ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	孔隙質 孔隙質	孔隙質 孔隙質	+	9	+	
12	*						ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	孔隙質 孔隙質	孔隙質 孔隙質	+	10	+	
13	罐						茶色粒子多	良	好	孔隙質 孔隙質	孔隙質 孔隙質	+	C	4-A		
14	*	19.8	6.4	6.4	19.8	平底、体部にかけた痕跡的 な凹、内面:乳白色の釉無し	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑褐色 黒褐色	黒褐色 黒褐色	+	D	8-1 9-1	
15	盆						口クロ成形、内面、底面部に痕跡的 な凹、内面:乳白色の釉無し	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+		2-1-4
16	*	4.8	6.8	6.8	4.8	平底、口縁部やや外反、体部直線的 な凹、内面:乳白色の釉無し	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	E	3-9-2	
17	*	4.0	5.3	5.3	4.0	平底、済手、体部やや内わん 口縁部直立、やや内手	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	F	4-	
18	釜?						ロタロ成形、内面:乳白色の釉 が点在	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+		5-10-1	
19	*	7.0	8.8	8.8	7.0	付高台、口縁部やや外反、済手	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	G	6-9-2	
20	盆	4.7	14.75	8.8	4.7	付高台、口縁部やや外反、済手	ロタロ成形、ヨコナ?	小石質 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	H	7-10-2	
21	*	6.65	7.1	7.1	6.65	付高台、済手	ロタロ成形、ヨコナ?	細かい粘土 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	I	8-10-3	
22	*						ロタロ成形、ヨコナ?	細かい粘土 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	J	9-10-3	
23	*						ロタロ成形、ヨコナ?	細かい粘土 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	K	10-11-3	
24	*	12.8	1.6?	1.6?	12.8	丸底、体部やや内わん、済手	ロタロ成形、内面、ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	L	11-11-2	
25	*	12.5	4.9	4.9	12.5	丸底、体部やや内わん、済手	ロタロ成形、内面、ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	M	12-11-3	
26	*	4.3	13.6	6.8	4.3	平底、体部やや内わん、済手	ロタロ成形、ヨコナ?	口縁部多 石子多	良	好	黑色 黑色	黑色 黑色	+	N	13-9-3	

遺物 番号	形態 寸法 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	手法上の特徴				内面	外面	調 査	出土地點	測量圖 番
				肉	骨	皮	肉					
27 环	3.45 (3.1)	11.0	7.5	平底、体温やや内わん、骨事 し横断外弧、体温やや内わん、や く骨事。	ロクロ成形、底部回転糸切、ヘラカ リ?、ヨコナダ	白色粒子多 い骨	肉	黒褐色	淡褐色	土師器	F	8-14 9-3
28 环	4.0	15.8	13.4	13.4 (3.8)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	白色粒子多 い骨	肉	淡褐色	淡褐色	土師器	+	15 11-4
29 环?	30 环?	16.8 (20.4-5)	15.8 (7.0)	13.4 (3.8)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	白色粒子多 い骨	肉	淡褐色	淡褐色	土師器	+	9-1 12-1
31 壁	7.6	9.0	8.4	9.0 (16.2)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	2 12-2
32 壁	7.5	9.0	8.4	7.5 (16.2)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	3 12-3
33 壁	7.5	9.0	8.4	7.5 (16.2)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	4 12-4
34 环?	7.6	9.0	8.4	7.6 (16.2)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	5 13-1
35 盆?	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	6 13-2
36 盆?	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	7 13-3
37 瓶?	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	8 13-4
38 盆	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	9 14-1
39 盆	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	10 13-5
40 盆	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	10-1 15-4
41 瓶?	16.2	20.7	12.2	16.2 (約40)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	15-1
42 瓶?	11.25	10.75	6.4	11.25 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	14-2
43 环	11.25	10.75	6.4	11.25 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	14-3
44 *	10.75	10.75	6.4	10.75 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	2 15-2,5
45 环?	10.75	10.75	6.4	10.75 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	3 15-2,6
46 盆	10.75	10.75	6.4	10.75 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	4 15-2,1
47 *	10.75	10.75	6.4	10.75 (6.4)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	5 15-2,3
48	5.0	5.0	5.0	5.0 (5.0)	ロクロ成形、内底、ヨコナダ	茶色粒子多 い骨	肉	黑色	淡褐色	土師器	+	6 15-3
												7 15-3

2. 石器、その他の出土遺物

備

小片 (半月形の約1/2)、穿孔1つ、片面のみ研磨
小片、色調は鮮紅色、刃部は一派深い
表面に鋸歯あり、裏面に斜面丸みあり、断形?

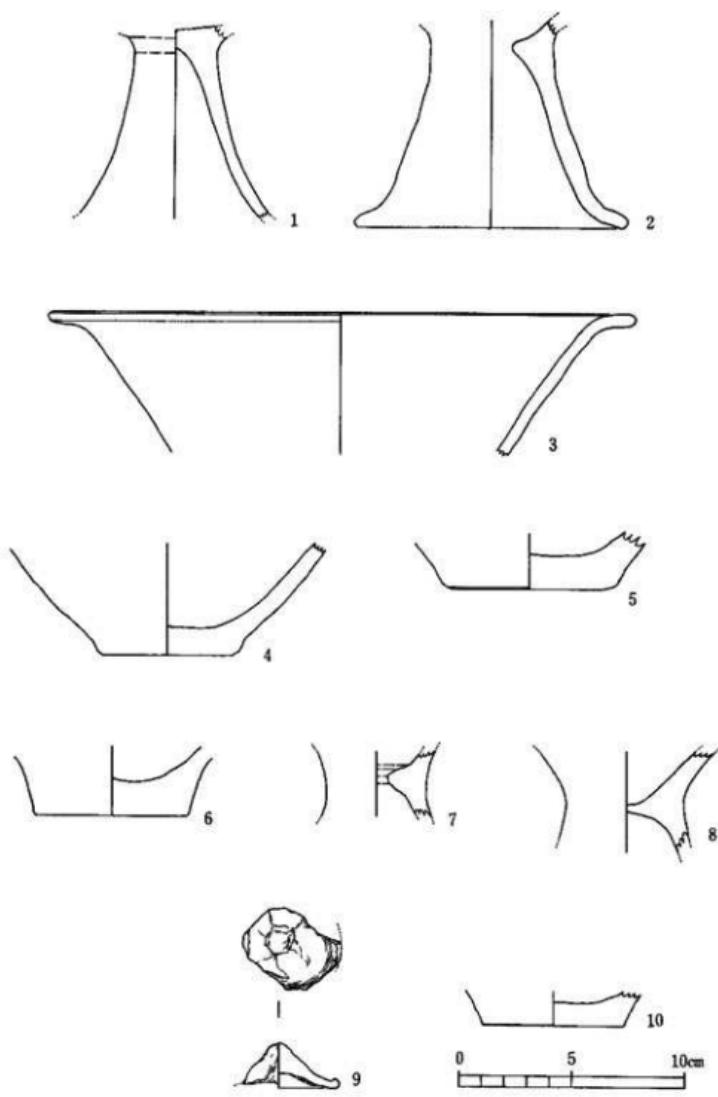
遺物番号	名稱	形	長 さ (cm)	最大 幅 (cm)	又は 厚 (mm)	出土地點	考
1	石笠	4.2	0.45	安山岩?	A	小片 (半月形の約1/2)、穿孔1つ、片面のみ研磨	
2	剥片石器	5.0	1.0	辰砂?	+		
3	鉛金具?	2.85	0.4	青銅製	G		

因
考

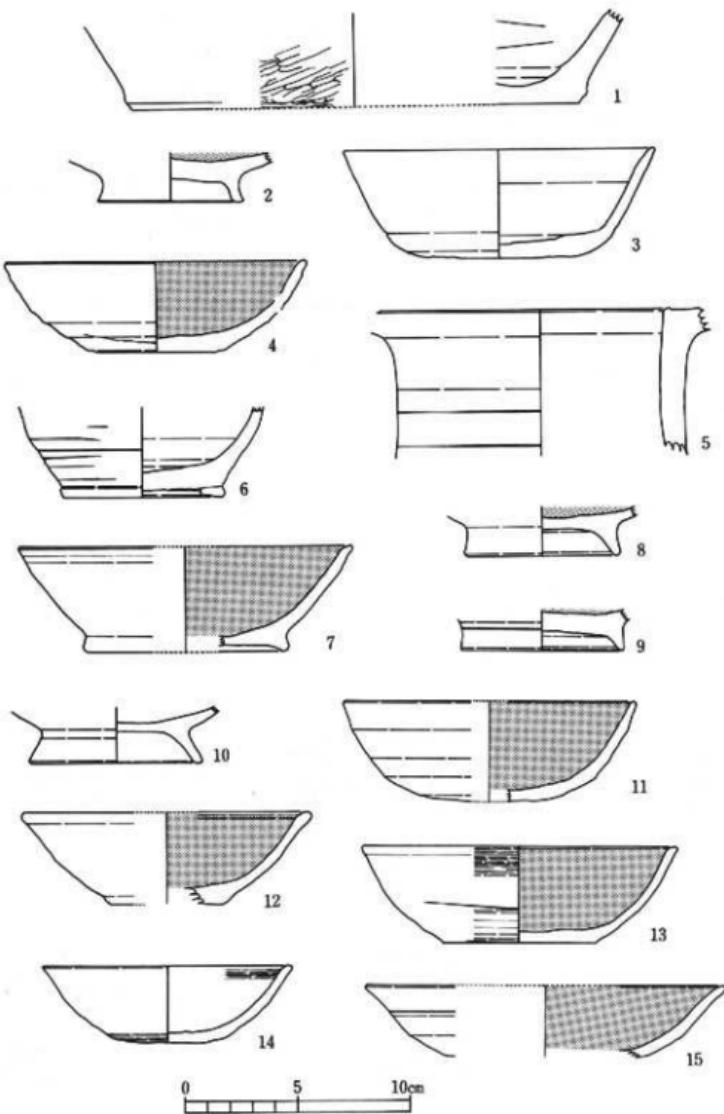
17-1

17-2

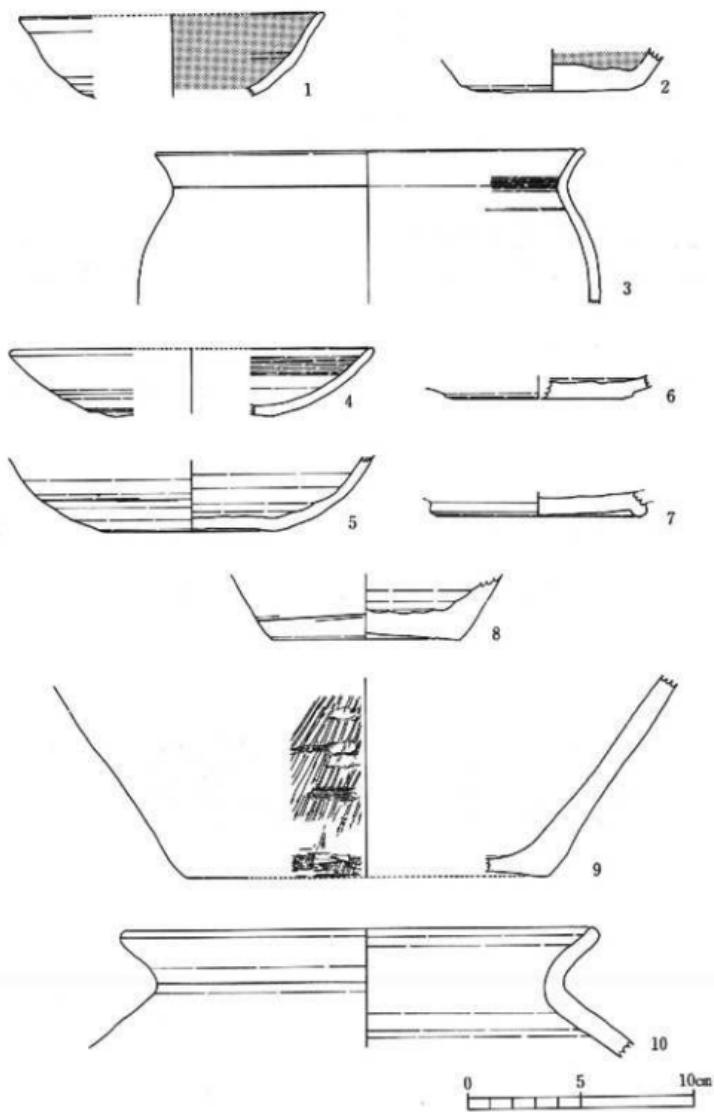
16-4



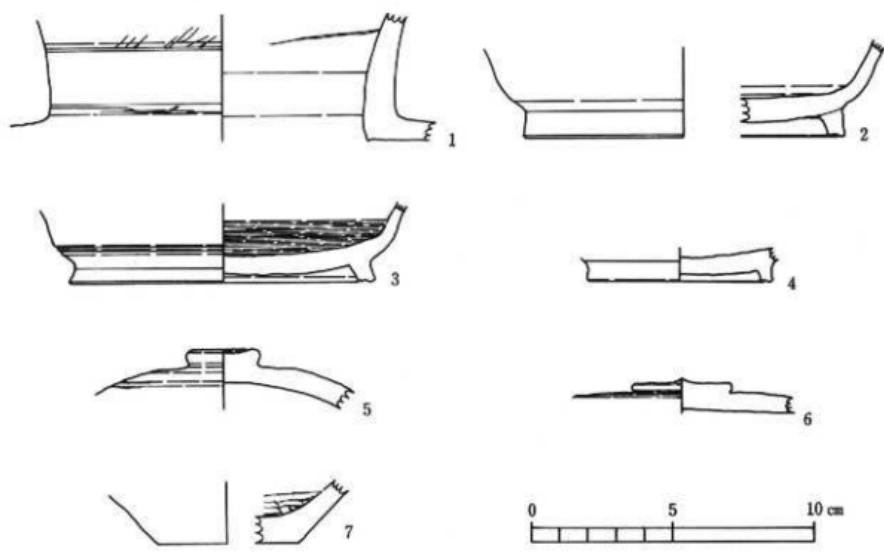
第7図 実測図 (1~6—A地区 7~10—B地区)



第8図 土器実測図 (1~2—D地区, 3~6—E地区, 7~15—F地区)



第9図 土器実測図 (1~10—F地区)



第10図 土器実測図 (1—F地区, 2~7—G地区)



第11図 石製品実測図 (1, 2—A地区)

第5章 塚田地区の調査

第1節 発掘調査の概要

1. 塚田遺跡の概要

塚田遺跡は、山田池の東直下に広がる原田遺跡と道を隔てて位置し、坪割畦畔などの条里景観（条里型水田面）を今も顕著に残す遺跡である。しかし、この条里型水田面の形成原形等については詳でなく、ただ、承応3年の「田畠貫高御帳・山田村」に「長丁」（同地名は現在も当遺跡に東接して存在する）とあり、また隣接する手塚地区の寛永13年の「手塚村貫高帳」に「ひの口」、「なわて」「横せぎ」など古い時代の水田経営にかかわる地名が散見するところから、同景観とあわせ、条里的遺構の存在の可能性が指摘されてきたのである。また先年山田から八木沢へ南北に通じる道路を拡張したところ、多数の須恵器、土師器が出土している。

2. 調査方法

今次の調査は、現在の条里型水田面下に埋没している可能性のある旧水田面、畦畔、水路等の遺構の検出をはかるために計画されたものであるが、その検出に当っては、現在の坪割畦畔とその坪内区画に直交させてトレンチを任意に設定し、その上層断面に見られる層序の変化等を精査することで、遺構の検出をし、出土遺物と併せ、その年代推定等の決め出しをすることにした。

第2節 土層及び出土遺物

1. 各トレンチの土層

各トレンチは、現在の坪割畦畔とその坪内の小区画に直交するよう任意に設定され、そのうち、第1トレンチから第4トレンチまでは東西に、第5トレンチから第7トレンチまでは南北に掘削し、必要に応じてそれらの拡張を行った。

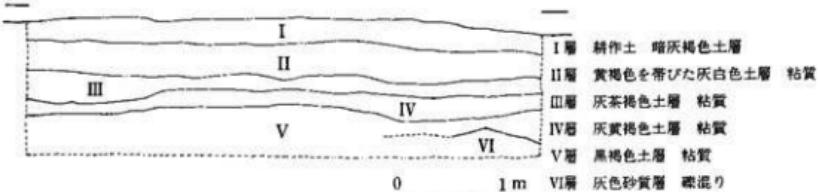
また、各トレンチの設定にあたっては、遺物包含層である黒褐色土層の検出と、湧水に富み、トレンチ内の壁面の崩落を誘発しやすい当地方の地質上の特殊性等を考慮し、1m～1.5mをその最深限度とした。

各トレンチの土層序は、遺物包含層である黒褐色土層を中心に、基本的には、ほぼ5層に区分されるが、堆積物も一定せず、層序も複雑な起伏を示すなど、統一した層序の決め出しへできず、そのため、各トレンチ内で決定をした。

(1) 第3トレンチ

現在の坪割畦畔の坪内の小区画に直交して東西に設定されたトレンチである。当トレンチの土層序、土層断面図は次のとおりである。

505.00 —



第12図 第3トレンチ 東側セクション

土層は6層に分かれ、概して粘性が強く、層序も3層まではなだらかな起伏を示す。灰黄褐色土層(IV層)から、遺物包含層である黒褐色土層(V層)にかけて山なりの隆起が認められたが、畦畔水田面等の遺構の検出はできなかった。

また、同じトレンチの調査面(東側セクション)と直交する南面の拡張調査をしたところ、黒褐色土層から灰色砂質層にかけて、他の黒褐色土層には見られないほどの水分を含んだ土層が検出された。(同層からは厚さ2cm、長さ14cm~15cmほどの木片が出土した。)さらに同層の下方約10cmの灰白色土層から深さ10cm~20cm、直径10cmほどの小穴が7箇所、さらにそれを模うように幅10~16cm、深さ約10~20cmの溝状の不齊な半円が検出された。(第5図版-C参照)

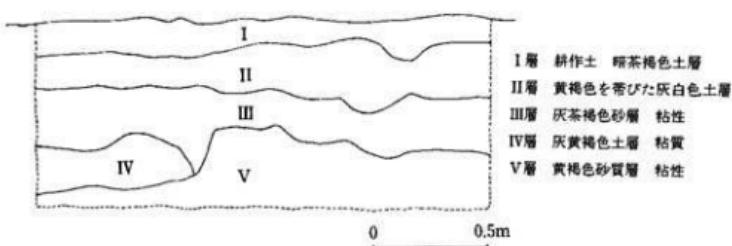
(2) 第4トレンチ

現在の坪割畦畔内の小区画が最も顕著に見られる部分を南北に直交して設定されたトレンチである。

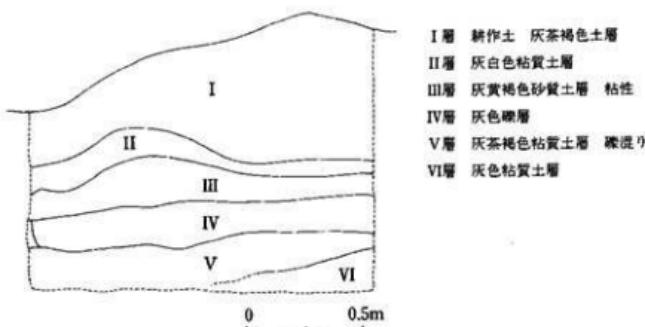
区画内に、ほぼ等間隔の5本の畦畔が見られるところから、その畦畔直下ならびに周辺部の土層断面を精査した結果、次の3箇所が注目された。

A地区、B地区、C地区の土層序及び土層断面図は以下のとおりである。

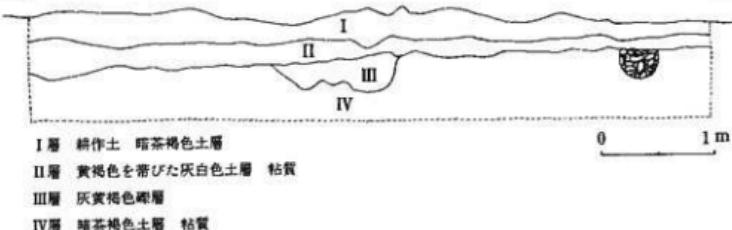
504.75 —



第13図 第4トレンチA地区 南寄り東側セクション



第14図 第4トレンチB地区 中央東側セクション



第15図 第4トレンチC地区 北寄り東側セクション

各セクションの土層序を見て共通するのは黄褐色系土層の多さである。黒褐色土層はほとんど見られず土器も検出されなかった。

現畦畔下の3地区については、A地区では粘性の砂層の下に黄褐色の不齊の台形状の盛り上がりが大小2箇所みられ、その間に粘性的砂層がV字形に入りこんで見られた。

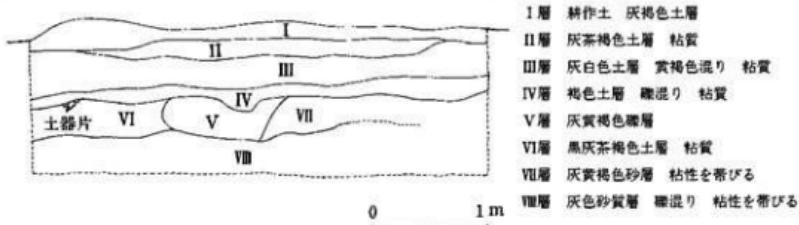
B地区では、現畦畔の頂部より3mほど北寄りになだらかな隆起が2層に渡って認められた。C地区では、耕作土下50cmの暗茶褐色土層に灰黃褐色礫層が半円形に入りこみ画されていた。同トレンチの南7mの拡張トレンチ黒褐色層からは小穴8個と溝状縫を持った木片が出土した。

(3) 第5トレンチ

第4トレンチまでが現在の坪割畦畔内の小区画を南北に掘削したものであるが、それらと対象的に東西に設定したのが第5トレンチ（以下第7トレンチまで）である。

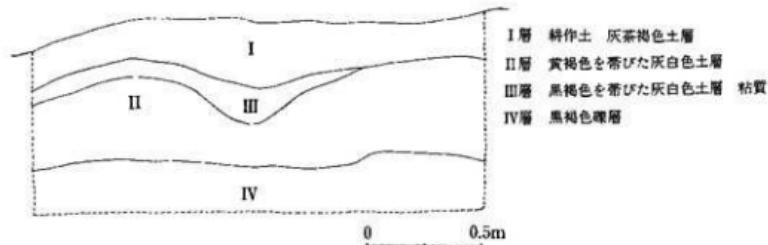
同トレンチは、現在の坪割畦畔とそれに添って流れる水路をあわせ掘削したことでの土層等が注目された。

505.00



第16図 第5トレンチA地区 南側セクション

504.00



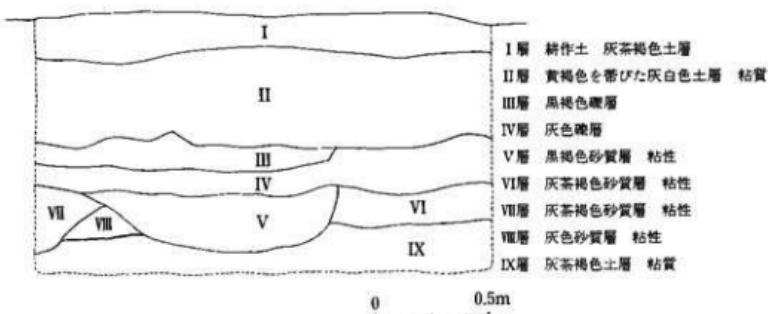
第17図 第5トレンチB地区 南側セクション

A地区では、耕作土とIII層の灰白色土層間に灰茶褐色土層がはさまれその両末端は、消滅している。せまい褐色土層と土器片を包含した黒灰茶褐色土層、灰黄褐色層をえぐったかに不齊な台形状の灰黄褐色砾層が検出された。

またB地区では、黒褐色を帯びた灰白色土層が耕作土と黄褐色を帯びた灰白色土層との間に10 cmほどの厚さでなだらかな山なりの起伏がみられた。

(4)第6トレンチ

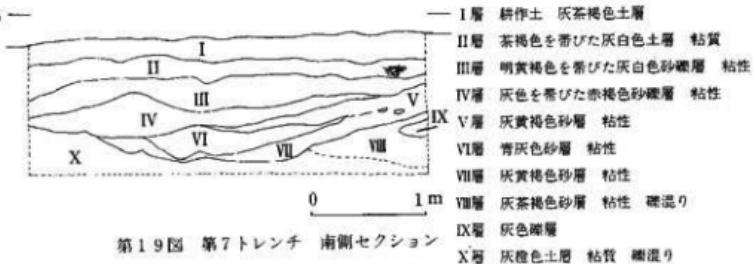
厚い黄褐色を帯びた灰白色土層と灰色砾層の間に薄く黒褐色砾層が入りこんで見られた。その下の灰茶褐色砂質層と灰茶褐色砂質層とを画するように半円形の厚い黒褐色砂質層が見られ、その基底は最下層である灰茶褐色と灰色砂質層をえぐっていた。層序及び土層断面図は次の通りである。



第18図 第6トレンチ 南側セクション

(5)第7トレンチ

全トレンチ内で最も複雑な土層序を示した。



第19図 第7トレンチ 南側セクション

灰白色砂疊層に赤褐色砂疊層が盛り上がりそこへ灰黄褐色砂層が入りこんでいる。その末端には青灰色砂層が堆積しさらに黄褐色と茶褐色の砂層が層を重ねている。概して円錐と砂層の重なりである。

青灰色砂層と灰黄褐色砂層から木片数点が出土した。耕作土下30cmから石組み(暗渠)が検出された。

(6)考察

各トレンチは東西南北ともほぼ5層に区分され、5層周辺が黒褐色土層である。この層からは奈良時代～平安時代にかけての土器片が多数出土したことから、旧畦畔等の検出が期待された。

なかでも、現在の坪割畦畔が最も顕著に残り、その小区画5本を南北に立ち割った第4トレントチが注目された。

精査の結果、南側の拡張壁からは黒褐色土層が認められ、土器片等の検出が見られたものの、東側セクションに、同層はほとんど認められず土器片等の出土（その堆土からは検出）もきわめて少なかった。

また、畦畔についても、各土層の起伏、土壤等に人工を思わせる変化は認められず、またそれにかかわる旧水田面も検出されなかった。

この点については東西に設定した第5～第7トレンチも同様であった。

また、旧水路についても現在の畦畔、水路下、ならびにその周辺部を精査したところ、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ等に不齊な半円形もしくは台形状に画された疊混りの墨が検出されたことで、旧水路とのかかわりが推測されたが確証は得られなかった。

また第3トレーニング南端の拡張調査の際、検出された環状の溝とそれをとりまく小穴については、それ以上の発掘調査が不可能な場所のため判然としないものの、住居跡の一部との推測もなされた。

2 出土遺物

第1トレンチ～第7トレンチならびにその拡張坑、排土などより多数の土器片、木片、石片など出土したが、すべて破片であった。

(1)出土遺物一覽

トレンチ名	遺物			備考 (出土地点)
	土器	木(製品)	石(製品)	
第2トレンチ	須恵器		石組み(埴輪)	第5層(黒褐色土層) 第2層
第3トレンチ	土師、須恵器 土師、須恵器 須恵器(灰釉かかる) 箱形水式土器(赤色塗彩) 土師、須恵器 土師、須恵器 土師(环片か)		拉張坑(黒褐色上層) # (#) # (#) # (#) # (#) # (#)	第4層 拉張坑(黒褐色土層)
			突起状のものと備えた 厚さ 3cm~4cm 長さ 20cm~15cm の石片 石組み(埴輪)	第2層~第3層
	木片 2			黒褐色土層
第4トレンチ	土師器 須恵器	木片 1 横に並んで小穴 6個を 穿ち、さらに両端に 1 箇所ずつ穴があり、溝 状の縁が横に上下刻ま れている。 長さ 8.6cm 幅 2.4cm 厚さ 1.2cm~0.8cm 穴の径 2mm~3mm	石組み(埴輪)	第3層 土 拉張坑(黒褐色上層) 第2層

第5トレンチ	須恵器 土師、須恵器 須恵器 灰釉		石組み（暗渠）	黒褐色土層 堆土 “ 表土 第2層
第7トレンチ	土師、須恵器 箱清水式土器（赤色塗彩） 土師、須恵器 箱清水式土器（赤色塗彩） 上縁器（内黒） 土師器（内黒）	木片（多数）	石組み（暗渠）	堆土 “ 北側拡張坑 “ 堆土 “ 第2層 第6層（青灰色砂層）

(2) 考 察

原田地区（特にA～B地区）のように、弥生式土器片は多数見られず、土師、須恵器片が比較的多く見られた。しかしトレンチ内及び堆土より出土した遺物はすべて小破片で、器形を知ることのできるものはなかった。

また、塙田地区のG地区からは、多数の須恵器片が出土していることから、これらトレンチからの出土土器片については、概略、奈良、平安時代に比定できると思われる。

また第3トレンチの2片の木片、第7トレンチのくい状の木片数点については、前者は板状、後者はくい状の相違はあるが、その土層の特質、出土状況などから旧畦畔とのかかわりが予測された。とりわけ第7トレンチの出土物は、先端部が鋭く尖り、同方向に傾斜して埋没していたことなどで、土留め用のくいの期待がもたれたが、拡張調査等の結果、それ以上の確証も得られず、不明とされた。その他、第4トレンチの拡張坑からの木製品、第3トレンチの石片等については、用途等不明ながらその出土層から、土器片とほぼ同時代のものと推定された。

第3節 調査の結果

今次の調査は、先年実施された更埴市、長野市等の条里的遺構調査の事例に基づき、現在見られる条里的水田面のうち、坪割畦畔とその小区画等に直交してトレンチを設定し、各トレンチ内の土壤の堆積具合等から条里的水田面、水路畦畔等を検出する目的で実施された。

その結果、同畦畔下の土層序は、基本的には、5層に区分され、とりわけ5層にあたる黒褐色土層からは、奈良～平安時代にかけての土師器片、須恵器片が多数出土するなど、それらにかかる旧畦畔、旧水路、旧水田面の検出が期待された。しかし条里的水田面（もしくはそれによらない旧水田面等）の検出は果たせず、現在の条里的水田面の形成ならびに原形などを明らかにすることはできなかった。

なお、近現代～近世にかけての構築と思われる暗渠が、ほぼ全トレンチの第2層～第3層にかけて、見出された。多くは石組みだけのものだが、ソダを下に敷きその上に石組みしたもの（第3トレンチ）、レール状に木材を敷きそこに石組みしたもの（第5トレンチ）もあった。今も、わずかながらその役を果たすこれらの排水施設で当塙田地籍の現地表下の様相を垣間見ることはできたが、それ以前との相關は不明である。

参考文献

長野県教育委員会「更埴市条里遺構の研究」

長野市教育委員会「迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構」(1983年)

第6章 概括

1. 遺跡と遺構

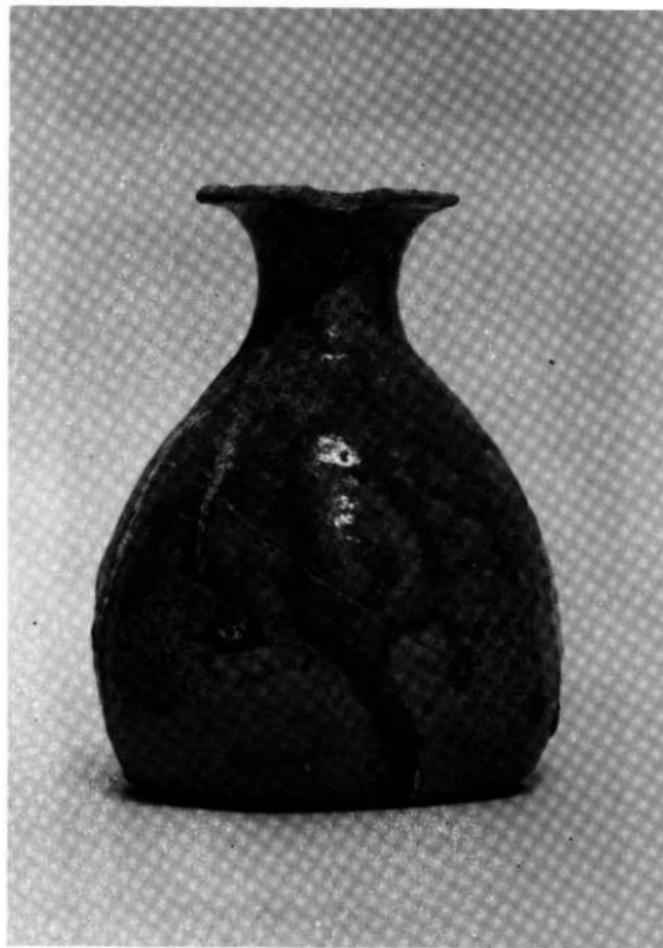
原田遺跡の中心は調査以前は竹内善吾氏所有の畑地であると思われていた。この地点に立つと周囲の眺望がよく、畑にはいっぱい土器の散見をみられるからである。試掘の時もこの畑に隣接する水田の第3層の黒色土層から、多数の弥生土器片が出土したので、本発掘では住居址を初めならかの遺構遺物の検出を期待したのである。しかし期待外れに終った。土器片は数多く検出するが、遺構は遂に発見されず、旧河床の砂礫層に達してしまった。土器片は完形品ではなく、接合できる土器片もなく、また土器自体が大分磨滅していることから、この遺物は土器捨場に遺棄したものと考えられる。さてこの遺棄した人々はどこに居住していたか課題を残した。

山田池のある丘陵地の斜面を水田に開削した箇所をD・E・F地区として調査した。この地点の特徴的なことは柱穴状ピットが多数検出されたことである。このピットは部分的なもので、なんのピットであるか説明に苦慮するところもあるが、明らかに高床式の住宅か倉庫を考えられるのである。また土塙、焼土、カマド址等断片的に検出された。丘陵地の斜面は水田開削のため表土の大部分は削り取られ、遺構の一部が断片的に検出されたのである。出土遺物と考え合わせると、この丘陵地は平安時代の集落地と考えてよさそうである。

2. 塚田遺跡の調査

塚田遺跡から塩田平一帯は一見して条里遺構を景観の上からも、図面の上からも残している。今回の調査は現水田下に過去の条里的遺構が検出できるかであった。不慣れと未熟のところ更に短期間の調査期間では、なかなか土層の変化は読みきれず、その上々に起るトレンチの崩壊や調査面上の問題に右往左往せざるを得なかった。しかし新しい知見が遺構や遺物の上からも調査方法の上からも得られ、次回の調査のための基礎となった。

図 版

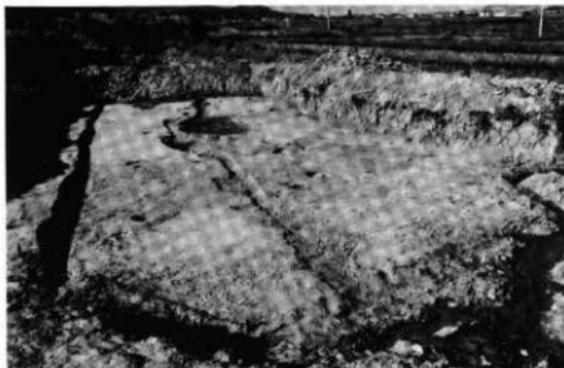


F地区より出土した灰釉陶器

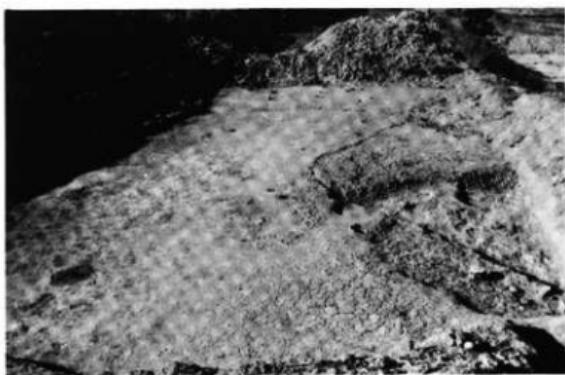
第1図版 原田遺跡遠景、D・E地区遺構全景



原田遺跡遠景（西側より）



原田遺跡D地区 遺構全景（南側より）



原田遺跡E地区 遺構全景（南側より）

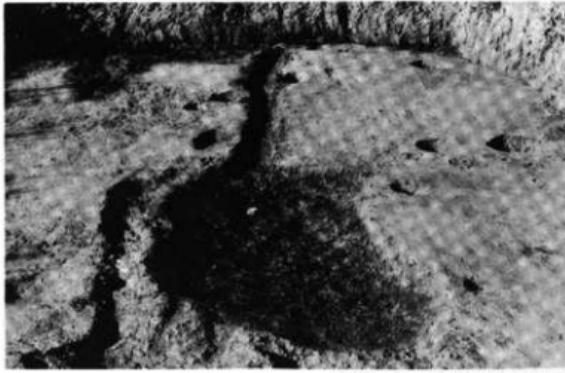
第2図版 A地区調査風景、D地区遺構



A地区調査風景

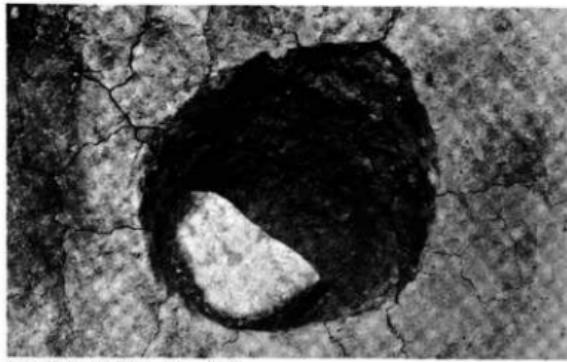


D地区柱穴状遺構（西側より）



D地区土坑状遺構（SK01）

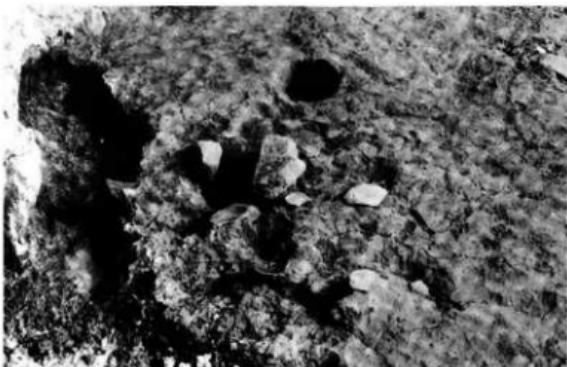
第3図版
D・E地区柱穴状遺構、
遺物出土状況



D地区柱穴状遺構 (Pit 8)



E地区柱穴状遺構 (Pit 9~Pit 18)



E地区遺物出土状況



E地区須恵器出土状況



E地区焼土出土地点



A地区遺物出土状況（A）

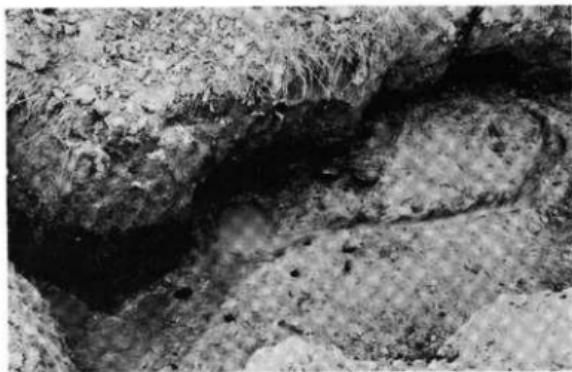


C地区遺物出土状況（B）

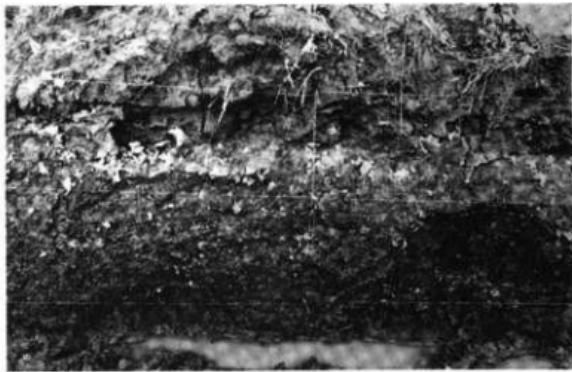
第5図版 塚田地区調査風景、第3・第4トレンチ



塚田地区調査風景



塚田地区 第3トレンチ南端 柱穴状遺構(C)

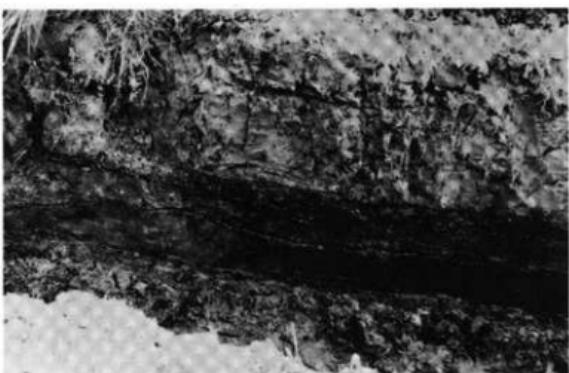


塚田地区 第4トレンチC地区

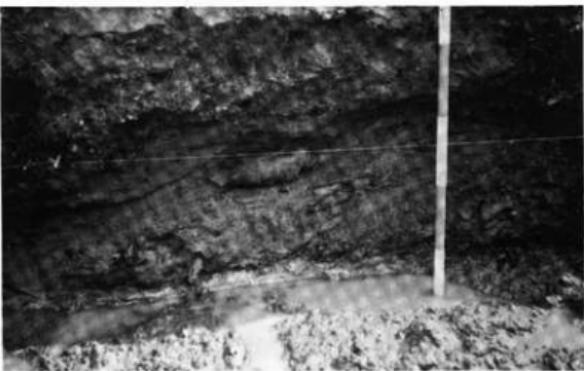
第6図版 塚田地区第5・第6・第7トレンチ



塚田地区 第5トレンチ東端

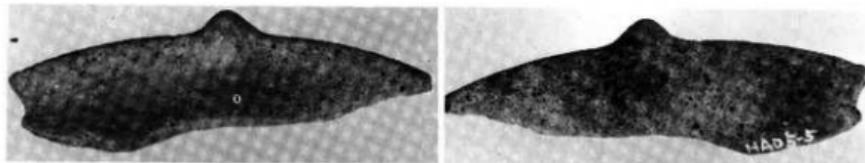
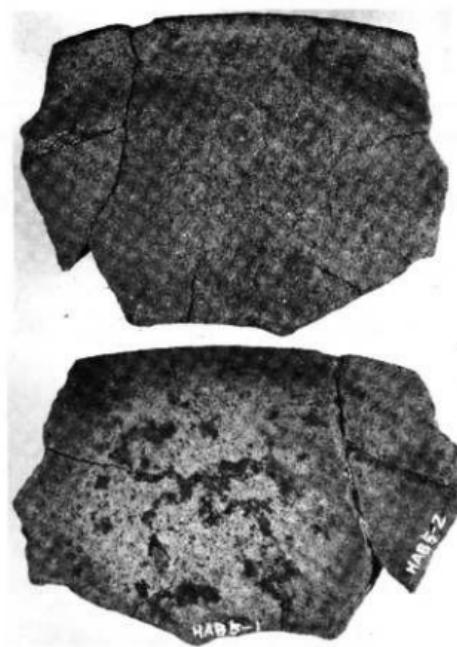


塚田地区 第6トレンチ



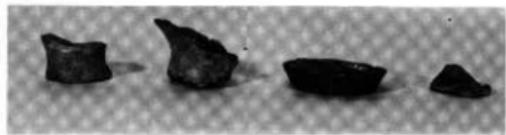
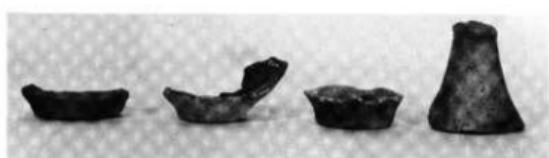
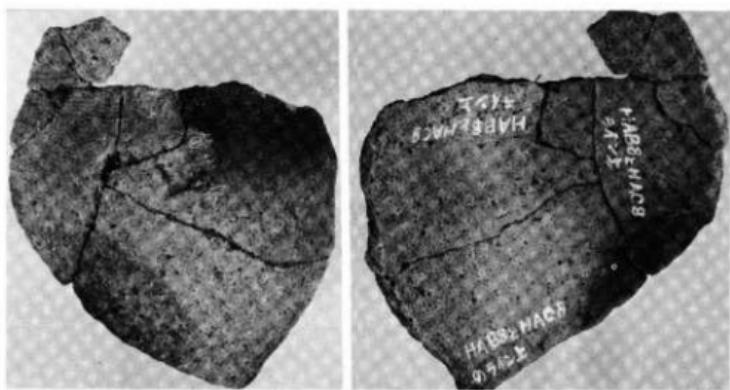
塚田地区 第7トレンチ

第7図版
A地区出土遺物



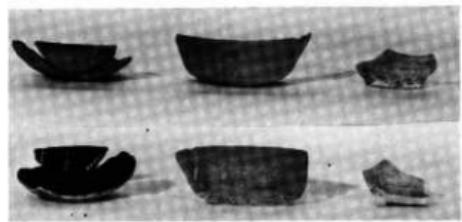
3

第8図版 A地塊、B地塊出土遺物

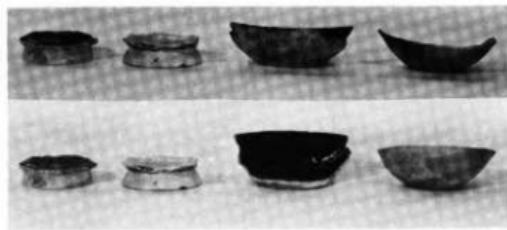




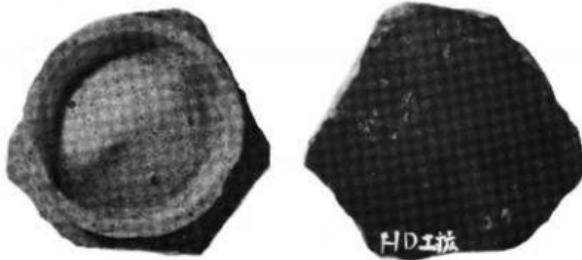
1



2

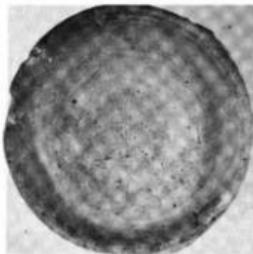
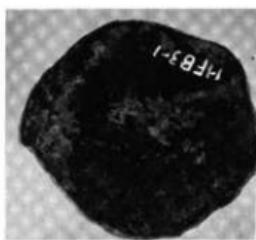
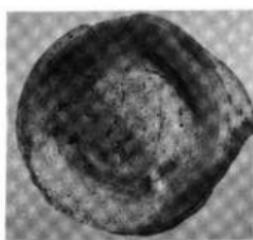
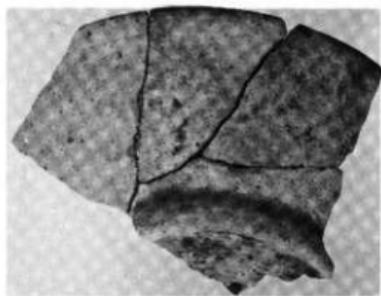


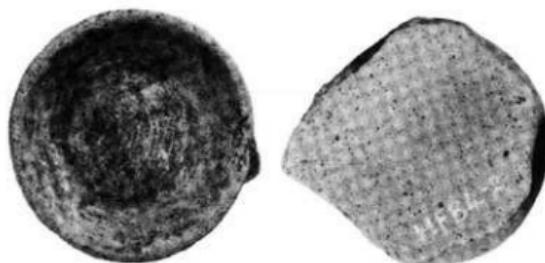
3



4

第10圖版 E地区、F地区出土遺物





1



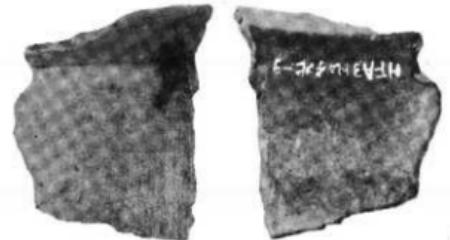
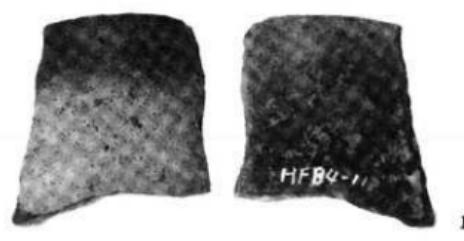
2

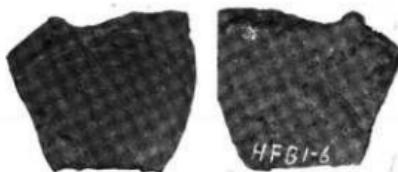


3

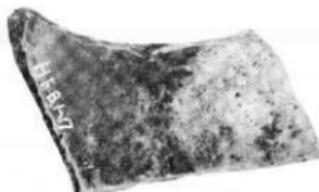


4





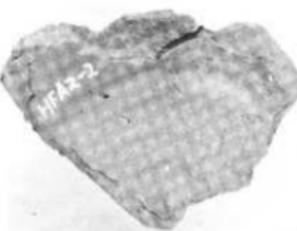
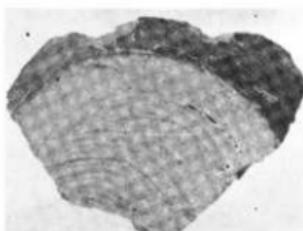
1



2



3



4



5

第14図版 F地区出土遺物

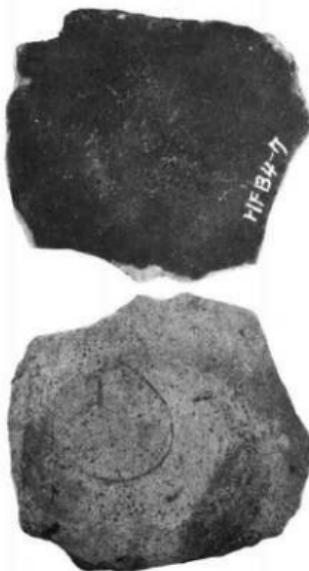
3



1



2



第15図版 F地区、G地区、塚田地区出土遺物



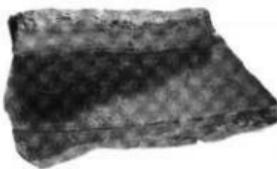
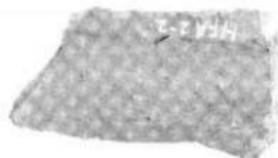
1



2



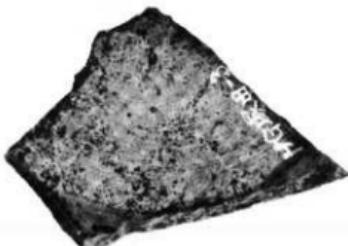
3



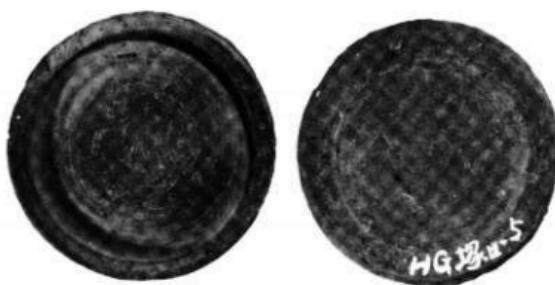
4



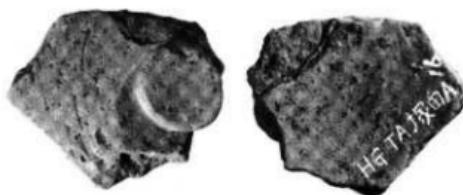
5



6



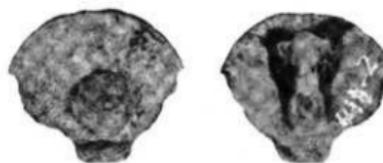
1



2

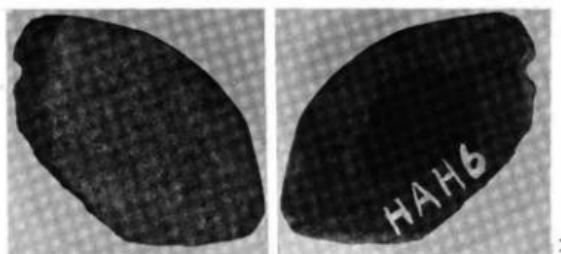


3



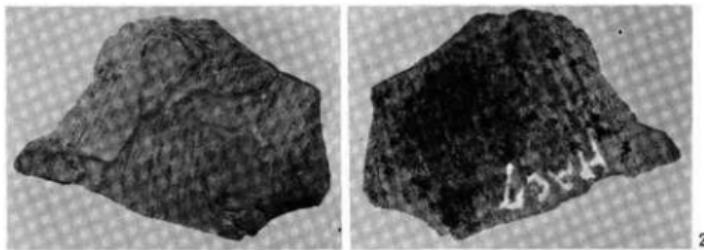
4

第17図版
A地区、塚田地区出土遺物

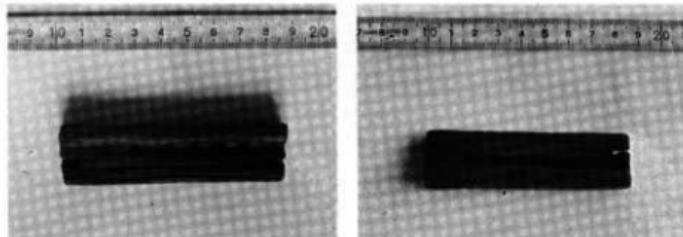


HAH6

1



2



3

塚田地区第4トレンチ出土の
小穴が穿たれた木片

上田市文化財調査報告書第23集

原田遺跡

—長野県上田市原田遺跡発掘調査報告書—

発行 1985年3月30日

上田市教育委員会

印刷所 (有)フタバ印刷